

訂改
實業帝國讀本
卷七

375.9
Ha7
資料室

教
4
20

43377

教科書文庫

4
810
44-1925
20003 02849

322A

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

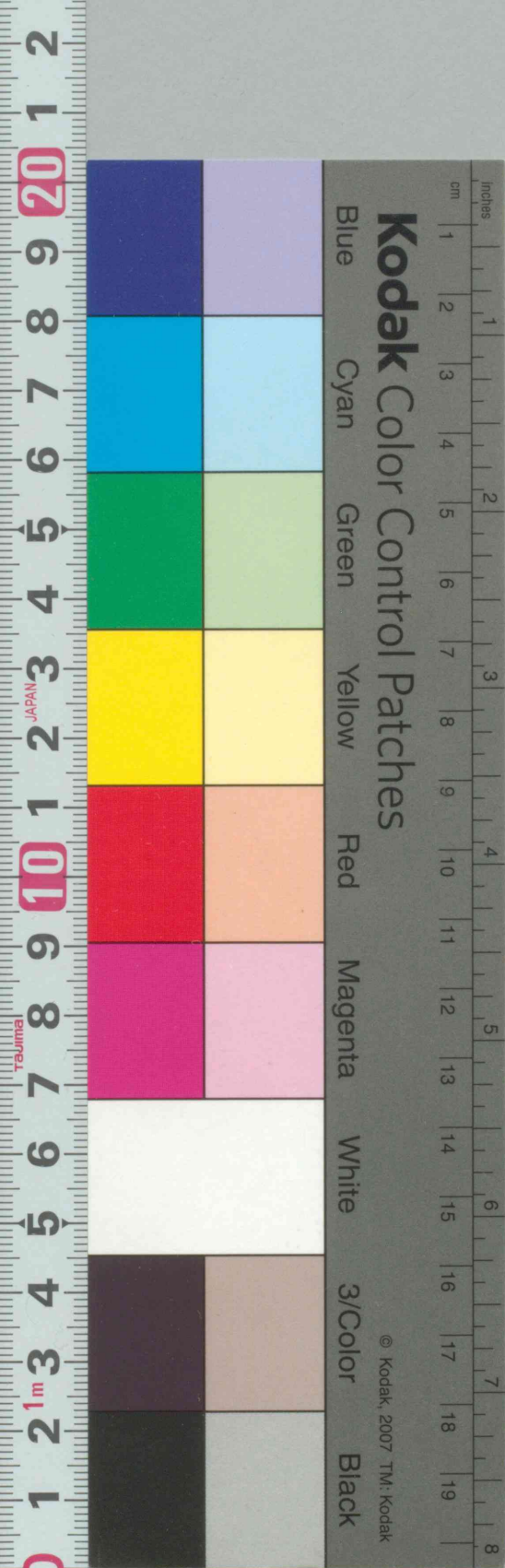
C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





法隆寺壁畫

教科書文庫
4
810
44-1925
2000302849

資料室
中央圖書館

375.9
H27

改訂
實業帝國讀本

文學博士芳賀矢一編

東京

合資
會社
富山房發兌

広島大学
教
53177
図書

広島大学図書

2000302849



訂改 實業帝國讀本 卷七

目次

一	天地の心……………	一
二	をりふしのうつりかはり……………	六
三	狂文三題……………	九
一	月雪花……………	
二	鐘 馘……………	
三	水鏡見る布袋の賛……………	
四	決 闘……………	二一
五	日本文學……………	二五

目次

一

六	ワイマールより……………	二
	三人の美術家(自修文)……………	二七
七	「永遠の都」へ……………	三三
八	廢墟……………	三九
九	晩春の別離……………	四四
一〇	平家雜感……………	五二
	一 都落……………	
	二 清盛入道……………	
一一	寂光院 その一……………	六〇
一二	寂光院 その二……………	六四
	佛法僧(自修文)……………	六六

一三	中宮寺の觀音……………	六八
一四	いかるがの宮……………	八一
一五	四季小品……………	八四
	一 春雨……………	
	二 風鈴……………	
	三 砧……………	
	四 秋の山田……………	
	五 冬のこゝろ……………	
一六	青葉若葉……………	八八
一七	奥の細道 その一……………	八九
一八	奥の細道 その二……………	九四

一九	夕日と富士	七
二〇	水郷の夏(自修文)	一〇三
二〇	雲と落日	一〇六
二一	旅行	一〇八
二二	草枕	一一四
二三	歌人西行	一二六
二四	銀の猫	一二五
二五	芳流閣上の血戦	一三三
二六	戯作三昧(自修文)	一三六
二六	黄菊白菊	一四四
二七	暮秋の雨	一四九

二八	西湖の月	一五二
二九	湖沼と人類	一六〇
三〇	當今の憂	一六六
	強ひられた文明(自修文)	一七二

目次終

改訂實業帝國讀本 卷七

一 天地の心

齋藤茂吉

ゆらく／＼朝日子あかくひむがしの海にうまれて
ゐたりけるかも

與謝野晶子

さゝやかに椿がかづく雪のみは彌生の日までおく
よしもがな

若山牧水

けふも雨ふる蛙よろこびしよぼ／＼にぬれて櫻も

寄りあひて
ますぐのた
てる青竹か
やぶのふか
すみのうぐい
すみのうぐい
水

咲きいでにけり



筆水牧山若

正岡子規

えんさきに玉巻く芭蕉玉さけて五尺のみどり手水

鉢をおほふ

平野萬里

つる引けば露こぼれおちからすうり花の白きがを

の、くゆふべ

堀口大學

初夏やあき地の草もうれしげに花をばつけて夕ぐ

れをまつ

前田夕暮

夏雲雀空にのぼりてかそかなり麥の穂並は日に

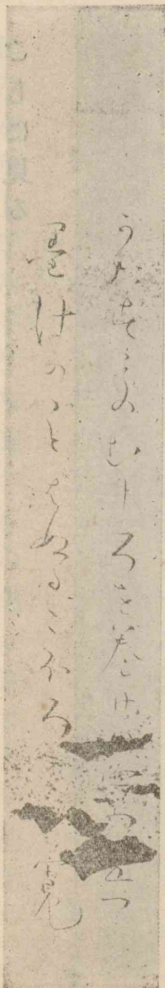
がよひつ

與謝野寬

啼きに啼くあさまし長しかしがましみじかき歌を

しらぬ蟬かな

かたす
むしを
つばし
けは墨
つけぬ
ほとろ
とろ
き
寛



筆寬野謝與

金子薫園

牛のゆく白川道の水ぐるまかたりここりこいこま

あるかな

吉井勇

二 をりふしのうつりかはり

兼好法師

をりふしのうつりかはり
つりかはり
「春はたゞ花のひさへに咲くばかりに秋のあはれは秋ぞまさる」と拾遺集、讀人不知

氣色立つ

名にこそ負へ

おほつかなき
さましたる
陰曆四月八日
賀茂祭、四月
の中の西の日

をりふしのうつりかはるこそ、物ごこにあはれなれ、物のあはれは秋こそまされ、人ごこにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ、鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、や、春深く霞み渡りて、花もやうく、氣色立つほごこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散過ぎぬ、青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ悩ます、花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古の事もたちかへり、こひしう思ひ出でらる、山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。
灌佛の頃、祭の頃若葉の梢涼しげに茂りゆくほごこそ、世のあは

水鶏のたゞく

蚊遣火

六月晦日の大

今更にいはいはじ
とにもあらず
あぢきなし
すさび
かいやり捨つ
べきもの



兼好法師

れも人のこひしさもまされ、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ、五月あやめ葺く頃、早苗さる頃、水鶏のたゞくなご心細からぬかは、六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり、六月ばらへ亦をかし、棚機祭るこそ艶かしけれ。
やうく、夜寒になるほご、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほご、わさ田刈干すなご、取集めたる事は秋のみぞ多かる、又野分のあしたこそをかしけれ、いひつゞくれば、皆源氏物語、枕草子なごに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはいはじにもあらず、思しき事はぬは腹ふくる、わざなれば、筆に任せつ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

をりふしのうつりかはり

遣水

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りこぼまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。

年の暮れはてて、人ごごにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。

すさまじき物にして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。

御佛名荷前の使立つなごぞ、あはれにや

んごごなき。公事ごもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はる、

さまぞいみじきや。

追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう聞きに、松ご

もごもして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあ

らん、ごごく、しくの、しりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに

音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人のくる夜さて、魂

祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には尙することに

すさまじ
十二月十九日
より二十一日
まで三日間宮
中に行はれた
佛事

二十陵八墓に幣
帛を奉られた
使

やんごとなし
十二月晦日に
行はれた鬼や
らひ

ことくし

ありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空の氣色、きのふに變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立渡して、花やかにうれしげなるこそ亦あはれなれ。——徒然草——

三 狂文三題

一 月雪花

蜀山人

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは、^(一)双が岡のすねものはいへれど、花は立春より七十五日、月は三五夜中の新月、後の月も亦めでたし。雪は豊年の貢物とはいへど、つめたく跡くさらかしもうるさし。明阿彌陀佛のふみにも書けり。げに降ることも、若菜の價たかうならぬほごこそ、門田もる犬も喜ぶべけれ。

(一)兼好法師

(二)山岡俊明

——千紅萬紫——

二 鍾 馗

宿屋飯盛

隨身舍人
降魔

垂跡

あさかほは
あさめしま
へに咲そめ
てさかりひ
もしき花に
そ有ける盛
飯

大臣と稱すれども隨身舍人も隨へず。降魔の利劍ありながら、鎮座せる社も見えず。顔に手足に朱を濺ぎて、拔身を取つてふるまはず。若し生酔かと思へば、かしは餅を引窓からのぞく。下戸か上戸か分くべからぬ文武兼備の進士の垂跡。げに千早振紙幟、仰げば愈、軒に高し。

—あづまなまり—

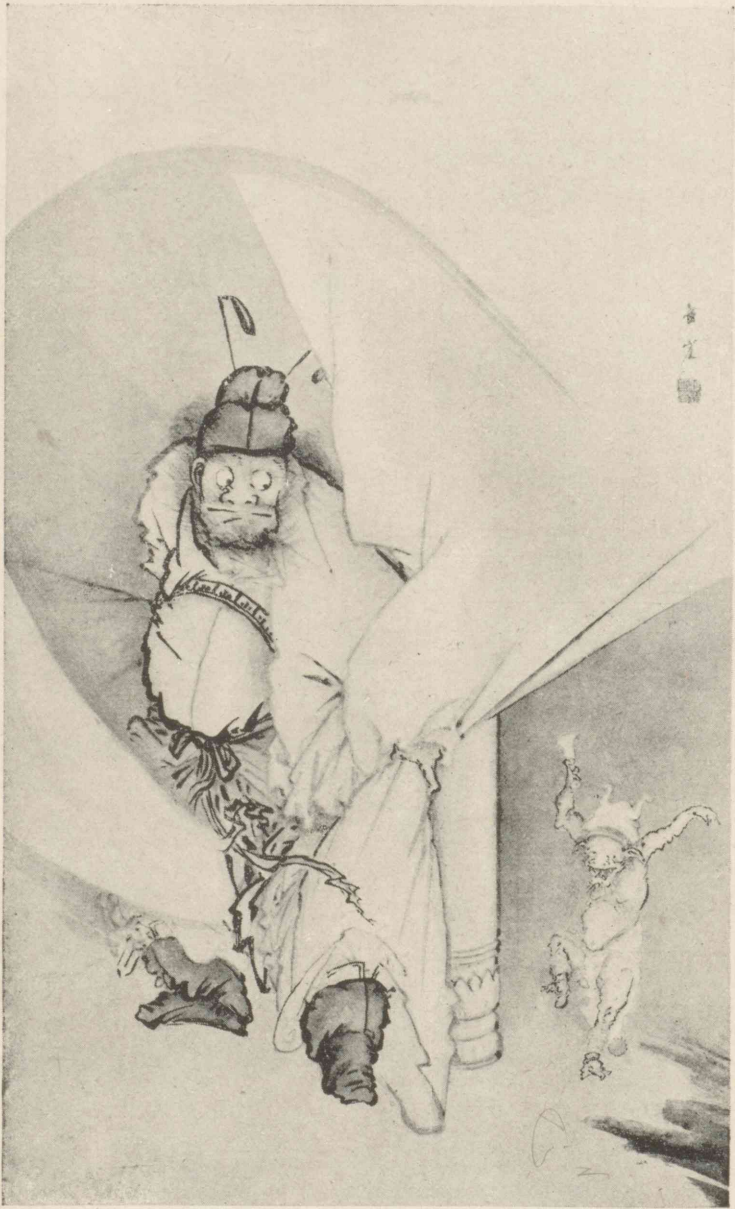
あさかほはあさめしまへに咲そめてさかりひもしき花にそ有ける盛飯

蹟筆盛飯屋宿

三 水鏡見る布袋の贅

手柄岡持

或人布袋禪師に問ひていはく、水あれば影をうつし、水なければ影うつらず。されどもその影をうつせる水はしばらくもこぼれまらずして流れ、その水にやどれる影は流るゝこぼれまらず。さればその影は何にこぼれまるとして流れざるや。この理を示し給へ。布袋答へていへ



鐘 燧

—狩野芳崖筆—

らく、水の流るゝは理なり。影のれざ^{ツレ}るも理なり。又問ふ、その理といふは何ぞや。布袋のいはく、理を擧ぐる時は流れず。擧げざる時は流る。又問ふ、理をあぐる時は流れず、あげざる時は流る。こは、質のりの事にあらずや。禪師は福神にして、よく貧人の情をも知り給ふことよ。といひ遣れば、布袋答へていふ、何ぞ知らざるべき。我もしち福神のうちなるをや。

——岡持家集われおもしろ——

四 決 闘

今は昔東國に源宛^{もと}、平良文^らといふ二人の兵^{つは}ありけり。宛が字をば箕田の源二^{もと}といひ、良文が字をば村岳の五郎^{むら}とぞいひける。この二人兵の道を挑みけるほごに、互に仲悪しくなりにけり。二人がいふことを互に中言する郎等ありて、言聞かしめけるやう、宛は良文を「その尊は我に挑むべきことかは。何事につけても手向かひしてん

や。あないごほし。ごなんいふご良文に告ぐ。良文これを聞きて、「我をばさはえいはじめものを。手のきかん方も思量もその尊の有りやう皆知りたり。げにしか思はば、然るべからん野に出であへ。」ごなんいふご宛に告ぐれば、魂太く心賢き兵なりといへども、人のいひ腹立てあはすれば、ごもに大きに嗔を成して、かくいひてのみやはあるべき。然らば日を契りて然るべからん廣き野に出であひ、互にごはん。ごなんいふご言聞かせければ、その日ご契りて、野に出であはんご消息を通はしつ。その後は各軍を調べて、戦はんごを營む。

すてにその契の日になりぬれば、各軍を發して、かくいふ野に巳の時ばかりに打立ちぬ。各五六百人ばかりの軍あり、皆身を棄て命を顧ずして心を勵ます間、一町許を隔てて楯を突渡したり。各兵を出して牒はたを通はす。その兵の還る時に、定まれることにて、箭を射懸くるなり。それに馬をもかへず見も返らずして靜かに還るをもて、

猛きことにはしけるなり。

さてその後各楯を寄せて、今は射組みなんごするほごに、良文が方より宛が方にいはずるやう、今日の合戦は、各軍を以て射組みせばその興侍らじ。たゞ君ご我ごが各手品を知らんごなり。されば方々の軍を射組みしめずして、たゞ二人走らせ合ひて、手の限り射んご思ふはいかが思す。ご宛これを聞きて、「我もしか思へることなり。速に罷り出でなん。」ごいはせて、宛楯を離れてたゞ一騎出で来て、雁勝を番ひて立てり。良文もこの返事を聞きて、喜びて郎等を止めていはく、「たゞ我一人手の限り射組みんごするなり。尊たちたゞ任せて見よ。さて我射落されなば、その時に取つて葬るべきなり。」ごいひて、楯の内よりたゞ一騎歩かし出でぬ。

さて雁勝を番ひて走らせ合ひぬ。互にまづ射させつ。次の箭に確かに射取らんご思ひて、各弓を引ききて箭を放つて馳違ふ。各馳過ぎ

ぬれば、又各馬を取つて返す。又弓を引きて箭を放たずして馳違ふ。各馳過ぎぬれば、又馬を取つて返す。又弓を引きて押しあつ。良文、宛が最中に箭を押しあてて射るに、宛、馬より落つるやうにして箭に違へば、太刀の股寄に當てぬ。宛また取つて返して、良文が最中に押しあてて射るに、良文、箭に違ひて身を避くる時に、宛、腰に射立てつ。急に又馬を取つて返して、又箭を番ひて走らせ合ふ時に、良文、宛にいはく、互に射るところの箭皆外る、箭ごもにあらず、悉く最中を射る箭なり。然ればごもに手品は皆見えぬ。つたなきことなし。然るにこれ昔より傳はる敵にも非ず、今はかくて止みなん。たゞ挑むばかりのこごなり。互に強ちに殺さんと思ふべきに非ず。宛これを聞きていはく、我もさなん思ふ。實に互に手品は見つ。止みなんよきことなり。さは引きて返しなん。といひて、各軍を引いて去りぬ。

互の郎等ごも各主ごもの馳組みて射合ひけるを見ては、今や射

落されん、今や射落されん。肝を碎き心を迷はして、ごもに射合ひて生きも死にもせんよりは、堪難く怖しく思ひけるに、かく射さして還れば、怪しみ思ひけるに、この事を聞きてぞ皆喜び合へりける。昔の兵かくありける。その後よりは、宛も良文も互に中よくて、つゆ隔つる心なく思ひ通はしてぞ過ぎけるごなん語り傳へたるこや。

— 今昔物語 —

五 日本文學

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、これ等の歌が日本文學の基礎といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌等は即ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へ

(一)聖武、孝謙兩朝に仕へて中納言持節征東將軍に至つた。萬葉集の撰者として傳へられる。延暦四年(一四四五年)薨。

たもので、推古以來支那の文明が傳はつて、段々漢文漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有の歌は、それは別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊な國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の(一)大伴家持等である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も多い。優美典雅といふ點に於て、忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想をあらはしたものである。

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて、日本語を記したものである。平安時代になつて百年の後は、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。ここに於て、假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集が出來たのみでなく、竹取物語、伊勢物

文藻

抒情詩
叙事詩

諸行無常
愛別離苦

語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類があらはれた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少納言の枕草子で、漢學の素養がその文藻を助けたことは、見逃されぬことであるが、上古以來行はれた和歌の風流情味が、常にこれ等の文學の背景となり、基礎となつて居るのも、争はれぬ事實である。大鏡や榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりはその材料を一轉化したものである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安時代には物語即ち叙事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立とともに、時代は一變した。隨つて文學も一變した。源平二氏の争が材料に採られた保元物語や、平治物語や、平家物語や、源平盛衰記などいふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述せられた。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とはその材料に於てこそ、それ

どれ差別はあれ、叙事詩たることは同様である。材料の變化にこそ
に言語も變化して、漢語及び漢文脈の加つて來たことは、自らその
内容と外形の調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛教の
盛なこの時代の著名な産物として數へられる。

足利將軍の世は、概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居る
が、明朝との交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進歩も著しく、鎌
倉の末からの進歩を承けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成
を見るに至つたのは、大いに注意すべきことである。平安、鎌倉二時
代を通じての叙事詩は、ここに至つて劇詩の形をなしたのである。
能は幕政時代を通じて衰へず、今日にも傳はつてなほ盛であるの
を見ても、いかにその我が國民の嗜好に投じたものであるかがわ
かる。その材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、
源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、又義經記、曾我物語などの

劇詩

(一)足利將軍、應
永十五年(一
〇六八年)薨
年五十一

世話材料

軍記物語に及んで居り、又世話材料も入れてある。歌ふ方から言つ
ても、音樂の方から言つても、舞の方から言つても、出来るだけ當時
の粹を抜いたもので、寧ろその精華を集めたものと言つてもよい。
あらゆる藝術の方面を集大成したものととして、當時の武士の修養
に資したことは多大であつた。

集大成す

徳川時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精
華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀なほどの大儒
が輩出した。又國學の研究も盛になつて、久しく忘れられてゐた平
安時代以前に遡つて、萬葉集も研究せられ、源氏物語も研究せられ
た。印刷の方法が進んで、古書の翻刻が盛になつて、庶民皆太平の世
を楽しんで、靜かに文學を翫味するの餘裕を得た。漢學、國學の勃興
につれて、専ら平民社會に行はれたいはゆる俗文學が發達した。淨
瑠璃や、小説や、俳句や、狂歌や、川柳やが、和漢古今の文學に根ざして、

翻刻

俗文學

樂天洒落

(一)徳川第五代將軍。
(二)徳川第十一代將軍。

新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犠牲的精神とが、これ等の各種の文學の上に溢れて居る。^(一)綱吉將軍の元祿時代と家齊將軍の文化文政時代が、その最大繁盛な時代であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小説の曲亭馬琴は文化文政の世に屬する。その他の作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じようとした爲、中には材料思想に鄙陋なもの少くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつた事も、注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、すでにその上に示されて居るやうに感ぜられる。

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へたことで、東西文明の融和は、我が國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小説、詩歌の翻譯から始つて、次第に佛獨露、瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩、叙事詩、劇詩の各方面にわたつて、常に新しい傾向生命を我が文學の上に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價值ある文學の興るのは、近き將來に期待せらるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入せられることもあるので、その間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

咀嚼す

扞格す

(一)Ima.
(二)東京市の北郊王子町にある細流。

六 ワイマールより

藤代 禎 輔

ワイマールは小さき都にて、山水の景勝に富めるにもこれなく候へども、いかにも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき所に候。公園には森の繁れる中を、イルムといふ瀧の川くらの流ちよろちよ

通り一遍

る致居り、その上には鐵の欄干に石柱といふいかめしき橋もあれど、丸太を組合はせて架けたる風流なる橋もありて、シルレルの腰掛さか、ゲーテの休息小屋さか、いづれも昔通り保存せられて、古を



像 テーゲ (藏館書圖ルーマイワ 作ルベリト)

しのぶ跡到る所に散在致居候。一々委しく點檢して詩作との關係なご取調べ候はば、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にてはそれも出来かね候まゝ、通り一遍の旅客として、目に觸れ候處を御報申上候。

けふ第一番に足を運びたるは圖書館に候。この圖書館は、初はゲーテが我が書齋にきて自ら設計したる建築の由、珍書奇籍も夥しく、ゲーテ、シルレルを始め有名なる人物の彫像、肖像畫なご、貴重な品も數々ありて、今まで文學史の挿畫にて纔かにその倣^{おも}をしの

〔Alexander

Trippel

彫刻家。西暦

一七四四年

一七九三年

〕Apollo

ギリシヤ、ロー

マの神話中重

要な神の名

〕Johann

Heinrich von

Dannecker

ドイツ著名の

彫刻家。西暦

一七五八年

一八四一年

詩聖

びるたる名作の實物に接し、トリッペルが靈腕に彫まれたるアポロそのまゝ、この評あるゲーテの大理石像、ダンネケルが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れて案内者に急きたてられ、不承不承歩を移すといふ始末、ままになるならいつまでもここにゐて、朝夕これ等の逸品を眺めたしこの念も起り候。圖書館を出でてシルレルの住宅を音づれ候。表よりの見附はさして立派といふ建物にはこれなく候へども、窓の板戸が綠色に塗立であるさまなご、何さなくゆかしき心地せられ候。中に入りて一階二階は梯子段を見ればかり、三階に至りて應接室、書齋、臨終室を一覽致候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具、椅子、寢臺、掛額等を据附けあるば



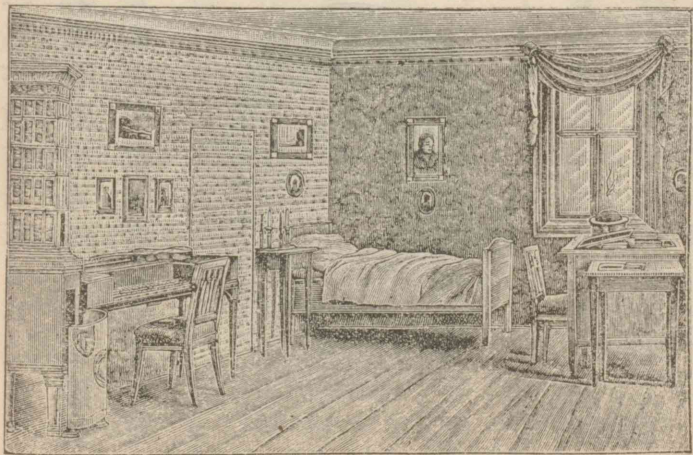
像 ルレルシ (藏館書圖ルーマイワ 作ルケッペンダ)

六 ワイマールより

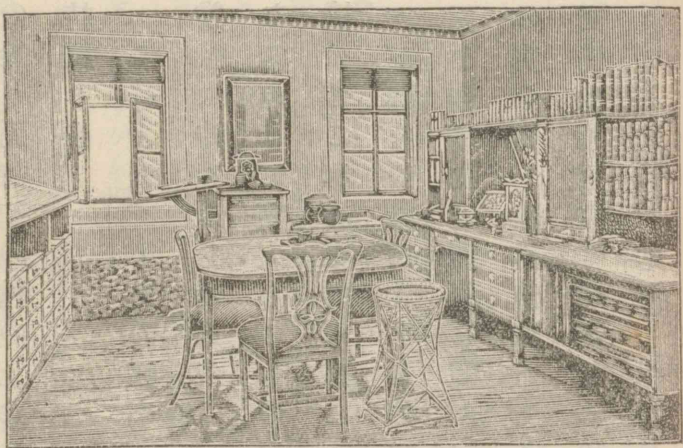
神來の筆

かりなれば、至つて質素に候へども、この内に起臥して晩年の傑作を産出しし現場かと思へば、感慨限りなく、腐れ林檎の香を嗅ぎて深更まで意匠を凝らしたるは、この机の前にやあらん、嗅煙草に睡魔を驅りて神來の筆を馳せたるは、彼の窓の下ならんなど、詩人ならぬ我が身も空想の天地に馳往きて、案内者の饒舌も耳に入らず候。臨終室を見るに及びて、その餘りに狹隘なるに驚き、かゝる偉人がこのむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと思ふ。ここに暗涙に咽せび候。

ここを立出で、國君の墳墓に詣て



シ ル レ ル の 書 齋



ゲ テ の 書 齋

候。これはワイマール代々の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲ一テ、シルレルの棺もこの内に安置せられ、木棺の上部は月桂樹の葉にて堆く蔽はれ、ゲ一テの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へあり候。兩詩人の優劣は存命中よりさかく議論ありて、ゲ一テ自身も、強ひて一人に團扇を上げずとも、これほどの詩人を二人まで出したるにドイツ國民は喜ぶべきはずなるを、さいひたるくらゐなるが、今この金銀の差別を見て、勿論兩詩人の地位若しくは逝去當時の事情に依るさはいへ、シルレルは死

薄倖

後まで薄倖なりこの感を起し候。しかし身を布衣に起して、王者ご
ごもに同一石室に葬らるゝは、比類なき名譽ごも申すべきか。感歎
の餘り、兩詩聖の棺の上なる月桂樹の葉數葉を摘取り、記念にごて
持歸り候。

時めく

これよりゲーテの住宅に赴きしが、さすが宰相の地位にありて
當代に時めきし詩人のごごごて、シルレルの居宅なごごは比較に
ならぬほご廣大なるものなれご、現今の程度よりいへば、極めて質
樸にて、これ亦案外の感にうたれ候。ゲーテの寢室に入りて、シルレ
ルが臨終の際ゲーテも病蓐に就き居りしかば、家人はシルレルの
死を告げなば病氣に障りなんごて秘しけれご、素ぶりに覺りてそ
の實を察し、潜然流涕したりごの一事を思ひ浮かぶれば、兩詩聖の
交情は東西古今に例なく美しきものなりご感涙禁め難く候ひき。
ワイマール見物も一通り相済みたれば、明日この地を發足致し、

(一) イエナを経てウルツブルグに赴くつもり、行く先々の模様は追々
通知申上ぐべく候。 — 帝國文學 —

三人の美術家 「自修文」

古代ギリシヤ以後、過去に於てヨーロッパ美術の全盛期を代表するものはイ
タリーのそれであつた。そのイタリアの美術の頂上といはれる文藝復興期を代
表する三人の美術家がある。即ちレオナルド・ダ・キンチ、^(三)ミケル・アンジ
エロ及び^(五)ラファエル、この三人の中、まづ巨人ミケル・アンジェロが^(六)ギルラン
ダヨ一の弟子から現れ、^(七)貴い思想の泉のやうなレオナルド・ダ・キンチがエロッキ
オの弟子から現れた。

この二人の中、レオナルドの方が二十ばかり年上であつたが、ほご同じ時代
に仕事をして、しかも至つて仲が悪かつた。アンジェロは名家に生まれ、レオ
ナルドは農婦の兒であつた。二人ごも少年の頃から畫がうまく、アンジェロは
又同時に秀れた大彫刻家であり、大建築家であり、大詩人であつた。レオナル

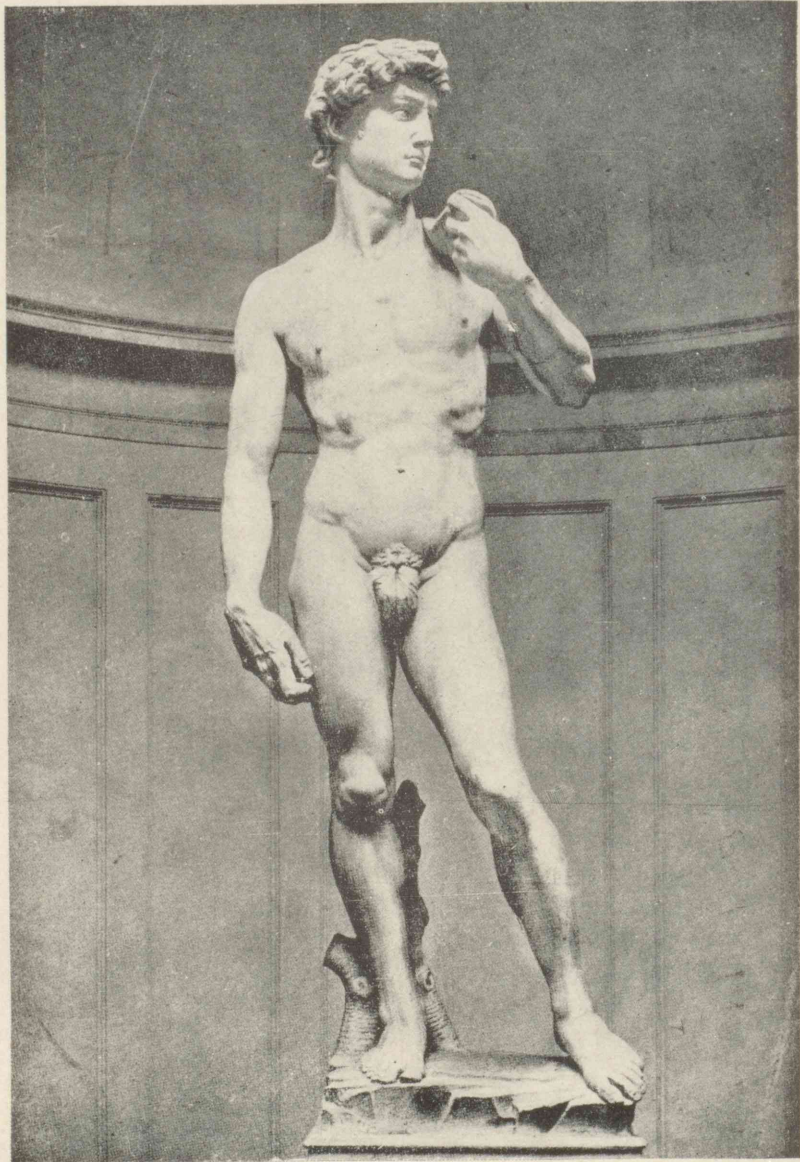
(一) Jona.
ドイツ、サク
セ・ワイマー
ルの首都。
(二) Würzburg.
ドイツ、バヴァ
リア王國の都

文藝復興期
英語ルネッサ
ンス (Renaiss
ance) 歐洲十
四世紀から十
五世紀にかけ
て學藝の大
いに興隆した
時代。
(三) Leonardo Da
Vinci (西暦一
四五二年—
一五一九年)
(四) Michael An
gelo (西暦一
四七四年—
一五六三年)
(五) Raphael.
(西暦一四八
三年—一五二
〇年)
(六) Guilandayo.
(七) Verrocchio.

ドは大美術家であるのみならず、第一流の思想家で、科學者で、數學家で、彫刻もやり、建築もやり、音樂もやり、何でも人よりよく出來た。世界で始めて飛行機のことも考へた。かういふ何でも出來る人は、その頃非常に尊まれ、完人といはれて羨まれた。こんな偉い人が二人並んでゐるのだから、他の美術家は小さくなつてゐた。

アンジェロは高い險阻な山のやうな人であつた。大きな大理石が山から切出されて、誰もそれに手をつける人もないのに、彼は進んで、「うん、これはちやうどいい」といつて、忽ち世界一のダビデの像をこしらへた。又或時は法王の注文でシスチンのお寺に、舊約全書の物語を題に壁畫と天井畫を頼まれたが、彼はこれまで主に彫刻をやつてゐて餘り畫はかゝなかつたのに、いざかくこなると、飲まず食はずで働き、さう／＼お堂のつきあたりと天井一面を、昔も今もためしのない何百人といふ裸體の人のある壯大な畫でかき埋めた。餘り上を向いて熱心にかいたので、久しく首が曲つてゐたといふことである。彼は又病身で、始終七つも八つも病氣を背負ひ、心配事が絶えずあつて、のんきに休む

David.
Sistine.
舊約全書
キリスト以前
に完成したユ
ダヤ民族の經
典。

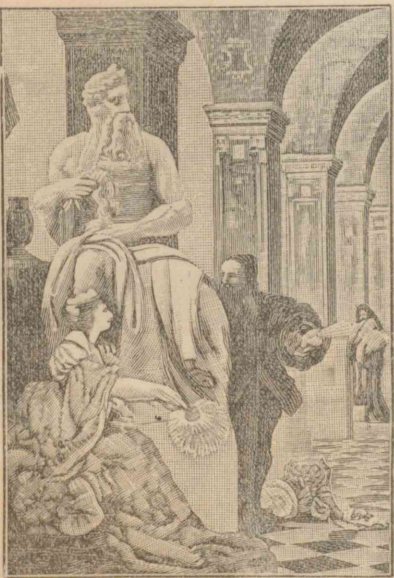


像 デ ビ ダ

——ミケランジェロ作——

Hebrew.
Moses.

暇などはなかつた。彼はヘブライの聖人モーゼの肖像を大理石でこしらへたが、それは彼その人のやうに崇厳で氣高く、思はず頭がさがるものである。モーゼはその手に法律を記した板を持ち、全智全能の角が生えてゐる。

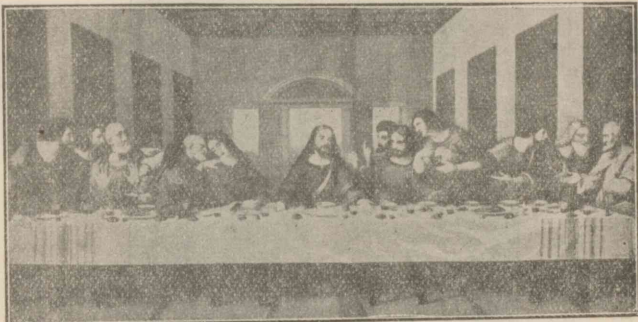


モナ・リザの肖像を製作す

それと反對にレオナルドは、じつとして靜かで、深く高く、夜の空の北極星のやうであつた。始終何か考へてゐた。曾て雨の降る日街に立つて、敷石の雨のしみを黙つて見てゐた。お弟子が先生はごうしたのかと思つてゐると、先生は笑ひながら、そのしみの形から考へて、大戦争の有様や、見てもぞつこする化物の格好を畫にかいた。街で綺麗な人にも逢ふと、^(三)どこまでもどこまでもついて行く。そしてその美の特徴を覚えてしまふ。モナ・リザといふ世界の寶の小さな肖像畫をかく時には、三年もかゝつてまだ出来なかつた。さうかと思

Monna Lisa

Richard Muther.
ドイツの美術批評家。



「最後の晩餐」のレオナルドがここに或禮儀知らずの人がゐて、アンジェロとレオナルドを競争さ

レオナルドが「最後の晩餐」の壁畫の時に、朝から晩までかいてゐて、ちつともくたびれた様子がなかつた。さうして畫をかゝない他の時には、新式な大砲を考へたり、運河を工夫したり、彈丸が當つても壞れない船を考へたり、飛行機の羽をこしらへたりした。今言つた大きな壁畫は、キリストが自分のはじめてのお弟子の中に裏切者があつた、それを暗にみんなに言ひきかすところをかいた畫で、お弟子は食卓に並んで、意外の事を聞き、すつかり驚いてざわ／＼してゐる。それが實によくかけてゐる。その後いたんでしまつたが、彼の代表的傑作である。ムーテル(一)といふ畫の批評家は、一枚の畫だが、一日かゝつて見る芝居よりもいいと言つて賞めた。

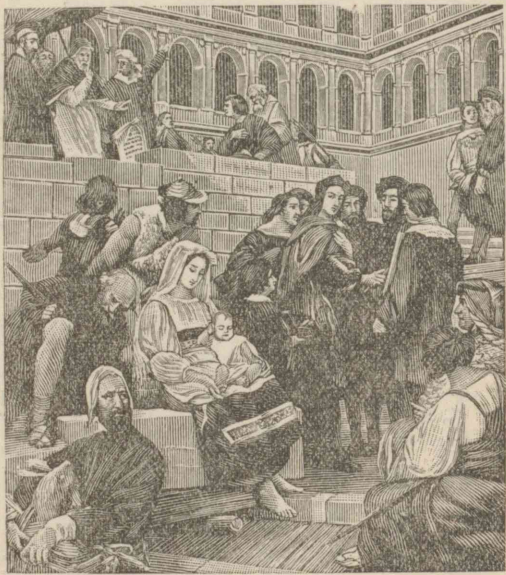
Dante Alighieri.
西暦一二六五年—一三二一年。
イタリアの大詩人。「神曲」の作者。

せようご考へた。二人に同時に仕事を言ひつけたのである。で、二人は世にも眞劍になつて、アンジェロは兵士の水浴を、レオナルドは軍旗の戦を、双方實に立派にかき上げた。しかしこの二つは、後で双方ともなくなつてしまつた。或日街で二人はつたり逢つたところがある。ダンテの詩の事で街の人が議論をして、その解釋を通り合はせたアンジェロに聞いたのである。ところがその時向ふからレオナルドが來た。レオナルドは横町へ曲らうとした。すると頑固なアンジェロは、すぐにもう何となく腹が立つて、街の人にレオナルドを指差し、「そんな事はいつに聞かぬがいい。あいつはおれより知つてゐるだらう。銅像も一つ出来ない癖に、氣に食はない、何て奴だ。」さう言つて、火のやうに怒つて行つてしまつた。レオナルドはよく仕事のやりかけを作つたのである。彼はしかしあつてモナ・リザといふ女の友だちに言つた、「アンジェロはいやに私を嫌つてゐるが、決して私より仕事が拙くはない。却つて二人はいい友だちなのに、どうもあの人には嫉妬心が強いので困る。」しかしかう言ふから、却つてアンジェロはなほ腹を立てる。レオナルドは晩年にはフランスに渡つて死んだ。

一體にこの頃は誰も彼も競争心が強かつた。美術家としての境遇も交り合つて、或事情で二人が幸福になるに、それと同じ事情で他のもう一人が忽ち不幸になるやうな場合も屢あつた。誰にもきまつて一人づつは同じ仕事の人に憎い憎い敵があつた。これをフランス美術家のことに比べると、大變な相違である。十九世紀の人は、それはみんな仲がいい。世界には段々愛が加つて行く。

身寄
るみうち
るる しん

レオナルドは晩年身寄もなく、寂しく街を歩いてゐるに、向ふから綺麗な青年が馬に乗つて、お供を澤山連れてやつて來た。よく見るに、そのお供の中には、昔レオナルドの弟子だつたが、いつか逃出して見えなくなつたへつほこ畫かきも交つてゐた。すると馬上の青年は馬を下りて、レオナルドに丁寧にお辭儀をした。それはラファエルといふ、その頃世間にもてはやされた若い利口な畫かきであつた。彼はわづかに三十七で死んだが、澤山に畫を遺して、後の世から非常に尊敬せられてゐる。しかし實はちつとも缺點のない畫をかいた。賢いことは實に賢い人だが、餘り圓滿すぎて、強味は他の二人に及ばない。アンジェロは彼を呼んで、「あれはこの世で一番幸福な人間だ。」と言つた。春の日に



す作製をナンドマ、ルエ、フラ

青空に歌ふ平和なひばりのやうにこいふ意味である。彼の畫を見るに、世の中がいかにも楽しく感じられる。しかしアンジェロの畫を見るに、人間が莊嚴に見える。レオナルドの畫を見れば、世界は實に深い貴い氣がする。いづれも美術の恩澤である。

——木村莊八「ニール河の草」による——

七 「永遠の都」へ

柳 澤 健

ローマ。ローマ。あゝさうさう、自分はローマへ來たのだ。
ヴィア・トリトーネの旅舎の四階の大きな安樂椅子のなかに身

Via Torlone

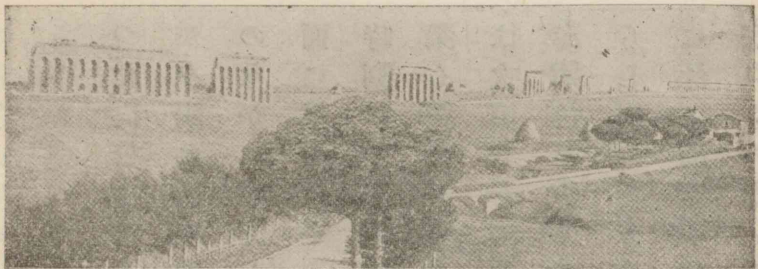
〔Henri de
Regnier.
フランスの詩
人。西曆一八
六四年〕

を沈めながら、自分は幾度この言葉を口にしたことだらう。曾て「現代フランス詩集」と題して公にしたことのある自分の譯詩集をば繙いたことのある人は、その中に翰林院の詩人アンリ・ド・レニエが「ローマよりの書翰」といふ一篇の詩のあることを憶ひ出してくれるに相違ない。その詩に現れてゐたレニエの喜が、今はそのまゝ、この身の喜となつて、自分の唇にご浮かび出るのであつた。

自分は部屋の真中に吊された燈燭(Lamp)の柔な光をまるで夢でも見てゐるやうな氣持で、うつと眺めた。いつともなく燈燭の光から眼を閉ぢた自分は、遠い國の事でも思ひ出すやうに、けふの午後汽車の窓から眺めた色々な景色の上にご思をば移して行く。さうした数々な景色の中から、際立つて鮮に浮かび出したのは、あのカムパニア(三)の夕陽と、その夕陽のなかで見たローマの一瞬間の眺であつた。

〔Chandeler.
〕

〔Campagna
ローマの外野。〕



ファイレンツェを出てからこのカムパニアの野にかゝるまでは、無味單調な山地が旅人の心を飽々させる。それが急に展けて、この一望限りかないカムパニアの緑野に出た時の喜は、この緑野の中央にローマの町が建てられてゐることを想ひやる時には、誰しも心の中にローマの持つ地位地勢の優れたことを、今更らしく肯かずにはゐられまい。そして又、あらゆる道がローマへ通ずる。といはれた言葉の如く、あらゆる心も亦ローマを圍むこのカムパニアの野の明るさ、廣さ、豊さを求めて集らうとしたことも、肯かずにはゐられまい。

自分は車窓より貪るが如くにこの豊かな曠野

の景色に眺め入つた。その景色の美しさは、歴史の數々の場面の幻さへも交へて、旅人の眼を、心を、その上にもしつかさつかむのであつた。自分は聲もなくかうした野の姿に見されてゐるうちに、いつか夕陽は西の地平へこ傾いて行つた。それは、まるで黄金いろの焔のなかに燃えしきる大きな金牌であつた。眩い光は樹の少い野一面に洪水のやうに漲つてゐた。時計を出して見るに、ローマに着く時刻はもう僅かしかない。町の端でも見える頃か、なほ更車窓に深く凭りかゝつて、それと思はれる方角を眺めてゐるうちに、太陽は次第々々に地平下に没して、その純らかな黄金いろは、急に眩い赤紫色を帯びて來て、地平に積疊する雲層を不思議な光と色で照らし出した。もつれ合つた雲層の間からは、まるで淵でも望むやうに、深い碧空が奥知れぬ色で覗いてゐた。北方フランスの邊では到底見られないこの錯綜混迷した空の色と形との下だつた、思ひが

けない方面に當つてちらりとばかり「永遠の都」の一部分が、――まざれもなく聖ペトロ寺の圓頂さへも車窓に映つて、すぐと消えてしまつたのは、その時の自分の心の、戦慄を、感動を、自分は容易に言葉をもつて説難いのを感ずる。

そのローマの中央に、夜深く今かうして安樂椅子に身を沈めてゐるのだ。あの赤紫色を帯びた黄金の光箭を町の上に投げかけた夕陽も、程なく窓を白く彩つて、ローマの上に曙を生むが爲に、天際(四)にペガサスをば急がせてゐるのだ。さうだ、自分も亦この朱色の朝のなかにローマの現れるのを樂みにして、詩人レニエに倣つて、ローマの持つ七つの丘の名を七度數へながら、寢床のなかへこ(五)はいることにしよう。

カピトリノ(六)、バラチノ(七)、アヴェンチノ(八)、エスキリノ……。

——南歐遊記——

(St. Petro.

(三) さも「ローマ」の書翰の中の句

(四) Pegasus (翼ある天馬)

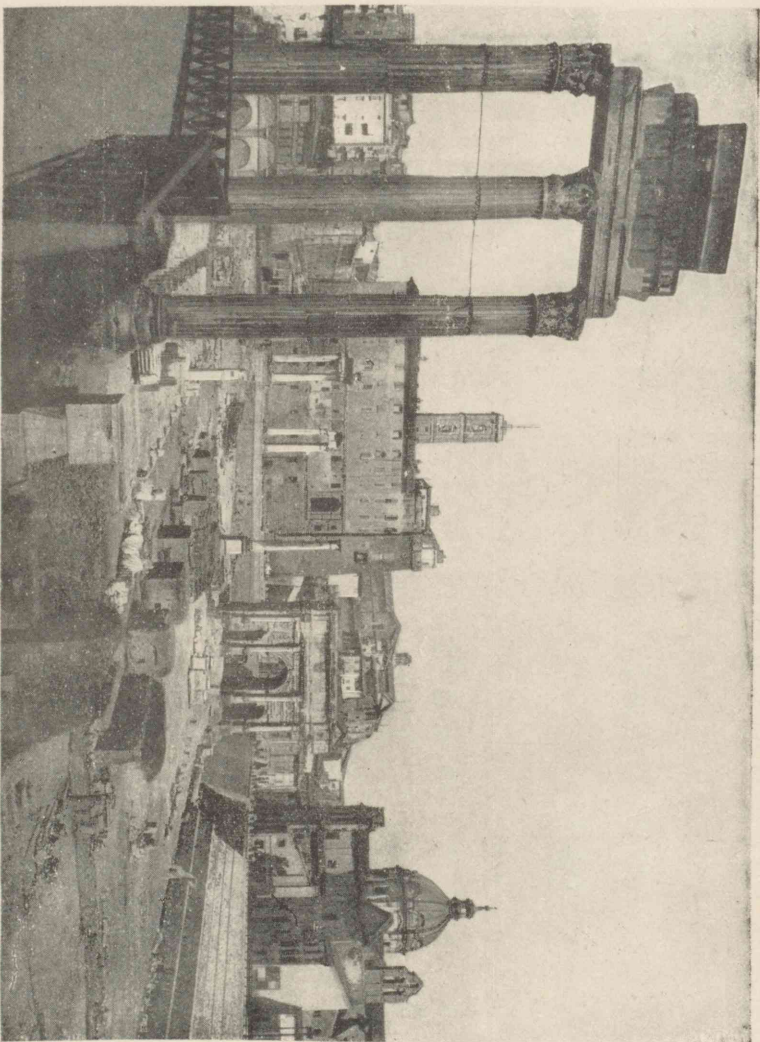
(五) Cartholino, Palatino, Aventino, Esquilino.

八 廢 墟

柳 澤 健

- (1) Forum Romanum.
- (2) Colosseum.
- (3) Piazza Venezia.
- (4) Vittorio Emanuele.

ローマに着いた三日目の午前、自分たちはかの有名なフォー
 ルム(1)ロマーヌム議政場(2)とコロッセウム(圓舞劇場)を見に出かけた。
 ビアツァ・ヴェネチアの廣場の前に小山のやうに聳えてゐるヴ
 イットリオ・エマヌエレの記念建造物を左に、曲りくねつた道を暫く
 行くに、程もなく眼の前に深淵が開けたやうに低くなつてゐる廢
 墟が現れる。これは何のことはない、人の白骨が無慘にも散らばつ
 てゐると變りはない。あちこちに倒れかゝつてゐる石柱、半分裂け
 てゐる石門、飛散つてゐる臺石、そのあたりを青々と染めてゐる草
 の葉と、その上にまるで鮮血のやうに眞紅にこぼれてゐるコクリ
 コの花と、それが照りかゞやく五月の陽の光のもとに、まぎ／＼と
 展開してゐる。まるで散亂してゐる人か獸の骨だ。



ムラーホ

殉情的

(1) Via della
Grazie

(2) Caesar

ローマの執政官
(西暦前101年—前49年)

(3) Augustus

ローマ帝國第一の皇帝
(西暦前63年—14年)

(4) Julia

(5) Caracalla

ローマの皇帝
(西暦181年—192年)

(6) Barabos

これを目見た時くらゐ、人間の事業の空しさはかなさが、烈しく自分の胸に來たことはなかつたといつてよい。自分は殉情的な史的な回顧の感情に身を委ねる代りに、索漠たる幻滅の感情が惡寒の如く自分の心を走り過ぎるのを感じた。殆ど立ちすくみたいまでの氣持に捉へられてしまつた。

ヴァイア・デルラ・グラツィエの通にある入口から、この廢墟の中に親しく足を踏入れて、四周に立並ぶ大小無數の無慘な石の列を眺め廻した時には、自分の心は一入暗く、はかない感情の波に揺られるのみであつた。ケーザルが創建して、アウグスツスが擴張したといはれてゐるジュリアの殿堂——それは自分たちの足許に累累たる石塊を残してゐるではないか。大帝カルカラがその王子とともにバルドスの戦勝を記念する爲に建てたといふ凱旋門——その誇耀と光の記念物も、青草の中に空しくその遺骸を留めてゐる

(1) Antonius
ローマの政治家
家。西暦前八
三年—三〇年

(2) Brutus
ローマの政治
家。ケイザル
の甥。西暦前
八五年—四二
年

(3) Titus
Commodus
Verus
Constantinus
ローマの皇帝
(西暦一五〇
年—三〇六年)

悵然

(4) "The Decline
and Fall of
Roman
Empire".
Gibbon.
イギリスの史
家。西暦一七
三七年—一七
九四年

るのみではないか。ケイザルが呼號し、アントニオブルータスが絶
叫したターリアの跡も、コミチウムの跡も、いくつかの臺石を僅か
の土の下から覗かしてゐるのみではないか。ヴェスタレスの宏壯
な邸宅の跡も、コンスタンチヌスの建てたといふ殿堂の跡も、壊れ
た石柱、裂けた臺石の外に、何一つ残してゐないではないか。
あゝ、これが人間の榮耀の跡なのだ。努力の跡なのだ。苦闘と光榮
の跡なのだ。自分は今更にかの支那詩人がよく口にする「此皆一場
夢」といふ言葉に思ひ當つた。悵然として人事流轉の姿に嘆息する
支那人の心持は、恐らく老莊の教や佛者の教から育まれて來たの
かも知れない。しかしながらそれは、いづれでもいい。たゞかうして
無慘な廢墟の中央に佇立してゐる自分は、この荒廢の址に面して、
ローマ衰亡史を書かうとする努力を眼覺めさせたといふギボン
の決心よりも、萬事を空しとして徒に長嘆息する支那の詩人の感

(1) 李白越中懷古
の詩「越王勾
踐破吳歸義
士還家燕錦
衣」

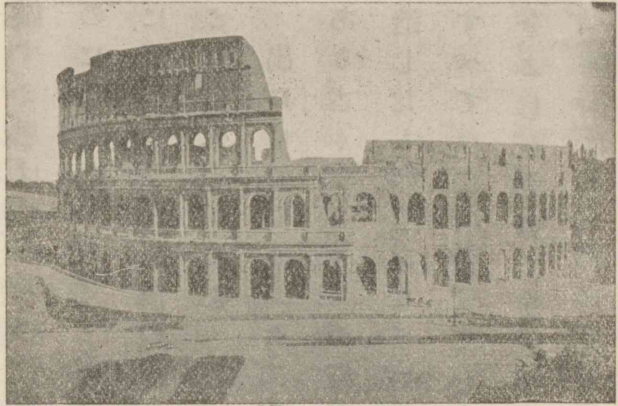
(2) Santa
Franzesa
Romana.
(3) Venus.
美の女神。

(4) 「藝術は長し。
人生は短し。」
(古語)

情が、——恐らく「ローマ衰亡史」を書く努力をすら空しいものに見
做すと思はれるその支那の詩人の感情が、遙かに遙かに親しいも
のに感ぜられる。……宮女如花滿春殿。只今惟有鷓鴣飛。——自分
にはかうした李白の詩句などが、思はず唇にのぼるのを禁めるこ
とが出来なかつた。

出口に近くサンタフランチェスカ・ロマーナの寺院といふのが
ある。古くヴェヌスの殿堂であつたものを、キリスト教の寺院に改
造したものであるといふ。あゝ、その改造も亦いつの日まで續かう。
すべては亡び失せてしまふのではないか。五十歳にして逝くもの
を、よし百歳まで生延びさせたこと、それが終に何にならう。

「藝術は長し」の言葉も、最早自分の心を牽止める力は持つてゐな
い。硬い石の上にあゝ、も深く刻み付けられたその美しい藝術の姿
さへも、全く壞れ廢つてゐるのをば、自分は今日あたり見てゐる



のだ。あらゆる人間の努力が、權勢が、名譽が、愛が、藝術が、残すところもなく等しく亡びへの途をたどりつゝあるのだ。永遠それは何といふ空しい綺語であつたことか。人間の作つたものの上に若し「永遠」があるさすれば、それはたゞ永遠の亡びといふのに過ぎないではないか。

暗然たる氣持でその出口を出るこ、
 一帯の草原を隔てて眼の前に、今度はコロッセウムの巨大な屍が横たはつてゐる。このコロッセウムも昔の形態が纔かに判断せられるといふくらの程度に残存してゐるだけであつて、
 到る所缺け、壞れ、裂けたまゝになつてゐる。野草は遠慮もなくその

ム ウ セ ッ ロ コ

はかない姿の上に生えのびてゐる。

一階は皇帝の席であつた、二階は元老院の人たちの席であつた、三階は一般庶民の席であつたといふやうなことも、今はたゞ冷たく心を打つただけだ。猛獸と猛獸の闘、猛獸と人の闘、さては猛獸に追廻されてその餌食にならねばならなかつたキリスト教徒、かの兇暴な皇帝ネロ、さてはかゞやかしい碧空一杯に擴つたローマ市民の歡聲、——あゝ、すべてはここにあつたのだ。そしてすべては亡びてしまつたのだ。

「Nero.
 ローマの皇帝
 (西曆三七年
 一六三年)

急に雨がやつて來た。ローマにはいつて屢、逢ふ荒い雨。私は急いでコロッセウムの側に聳えてゐるコンスタンチヌスの建てたといふ石の門の下に駆けこんだ。

雨の亂れてゐる廢墟のなかに、心はわけて佗しかつた。……

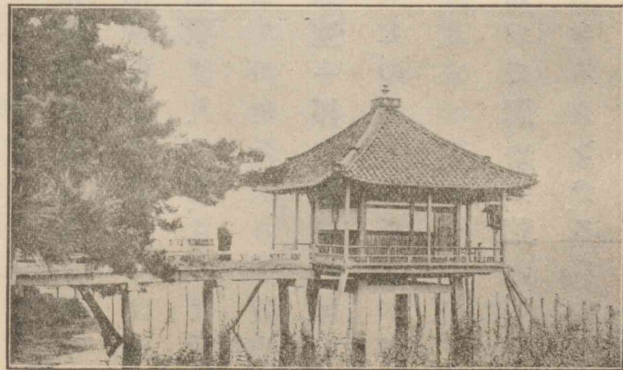
——南歐遊記——

九 晩春の別離

時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

佐保姫の春の
車駕

君をおくりて花ちかき
高樓^{たかろう}までも来て見れば、
緑にまよふうぐひすは
かすみ空しく鳴きかへり、
白きひかりは佐保姫の
春の車駕^{くるま}を照らすかな。



島崎藤村

琵琶湖

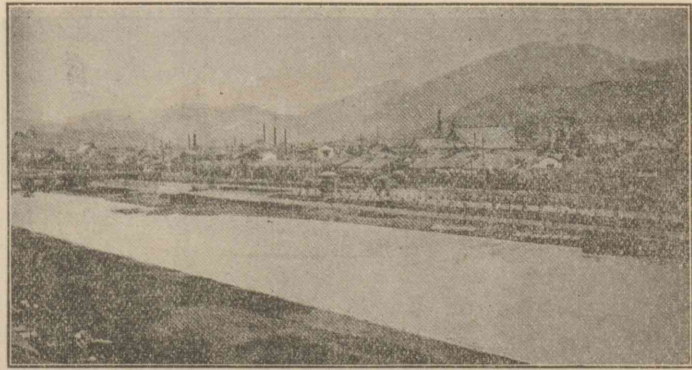
(一) 白河法皇

これより君は行く雲こ
ともに都を立出でて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膽吹の山高く
西には比叡^{ひゑ}比良^{ひら}の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想をか
沈める波にたふらん。
ながれはむなし^(一)法皇の



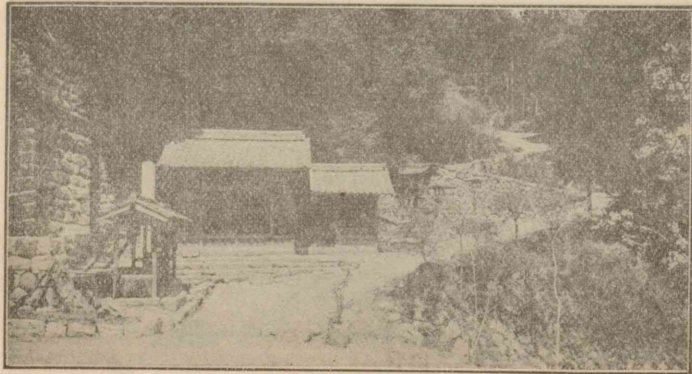
比良山

夢はるかなる賀茂の水
 水にうつろふ山城の
 みやびの都行く春の
 かすめる姿見つくして、
 畿内にせまる伊賀伊勢の
 鈴鹿の山の波さほく
 海に落つるを望む時、
 いかによろづの恨をば、
 空行く鷺に窮むらん。
 春さり行かば青によし
 奈良の都に尋ね入り、
 さしつき君がこひしたふ



川 茂 賀

御堂のうちに遊ぶ時、
 ふるき藝術の花の香の
 伽藍の壁にのこりなば、
 いかに韻を身にしめて、
 深き思にしづむらん。
 さては秋津の島が根の
 南のつばさ紀の國を、
 めぐりて進む黒潮の、
 鳴門に落ちて行く所、
 あまぎは遠く白き日の
 光をもらす雲裂けて、
 目に遙かなる遠海の

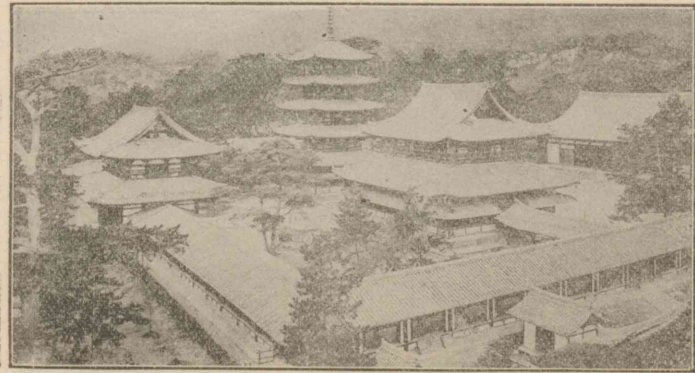


(現権鹿鈴) 山 鹿 鈴

波のをぐるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん、

又は名に負ふ歌枕、
なみに千こせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ、
松よろづ代の音にひびく
舞子のほまのゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞く時は、

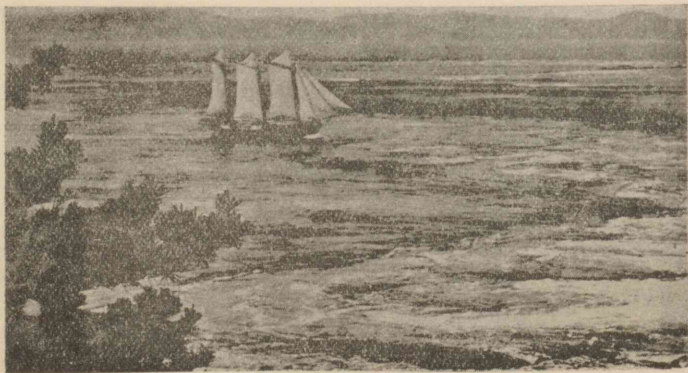
さ霧



法隆寺

いかに浦邊にさすらひて、
遠き昔をしのぶらん、

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながる、白波を
あげんさすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば
野邊のひめぐこ、森行かば
森のひめぐこ探りもて、
たかきに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の
ながれをきはめ、山々の



鳴門

朽ちせぬ琴

神をもよばひ、谷々の
 鬼をもおこし、歌人の
 魂をも遠く返しつゝ、
 清しき聲をうち揚げて、
 朽ちせぬ琴をかきならせ。
 さらば名残は盡きずとも、
 たもごをわかつゆふまぐれ、
 見よ、影ふかき欄干に
 けむりをふくむ藤の花。
 北行く雁はおほ空の
 霞に沈み鳴きかへり、
 彩なす雲も愁へつゝ、

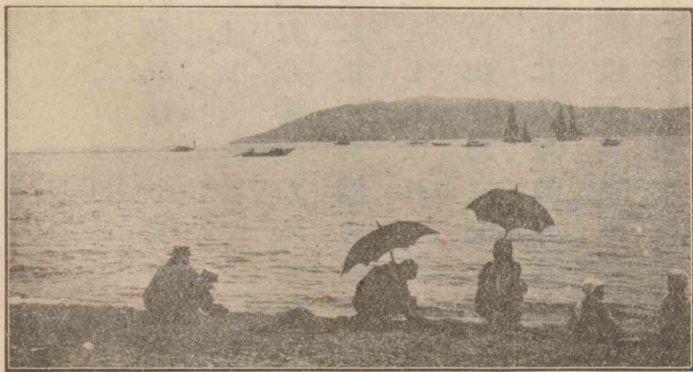


子 舞

君を送るに似たりけり。

あゝ、いつか又相逢うて、
 もこの契をあたゝめん。
 梅もさくらも散りはてて、
 すでに柳は深みどり、
 人はあかねご、ゆく春を
 いつまでここに留むべき。
 われに惜しむな、家苞の
 一枝の筆の花の色香を。

— 藤村詩集 —



島 路 淡

一〇 平家雜感

高山林次郎

一 都 落

凡そ世の中に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにもまた目覺しきはなかるべし。

南都の餘燼未だ冷めず墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治淀の備もろくも潰えて、都も今を限りごぞ見えし。あはれ一門の天下身を置くに所なし。世はかく憂き^(五)にみ吉野の山のあなたに隱家はなきか。いざさらば己みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の^(六)みゆきに、一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限りもなう、復歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅池殿、西八條以下一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家をあはせ

(一) 治承四年十二月、平重衡、父清盛の命を受けて奈良東大寺興福寺を焼いた。
(二) 養和元年三月、重衡等、源行家を尾張國墨股に討つて大ついにこれを破つた。
(三) 養和元年、平氏屢、義仲に破られた。
(四) 壽永二年七月、義仲延曆寺に據つた。
(五) 「み吉野の山のあなたに宿もがなうき時のかくれ家にせん」人不知、讀人不知、讀壽永二年七月、義仲を避けて平氏西海に走つた。

一炬の煙となす

鳳闕 椒房

(一) 「ふるさを焼野が原さかへりみて、末も煙の浪路をぞ行く」平家物語、平經盛

翠華搖々

身にしむ秋は欺かれず

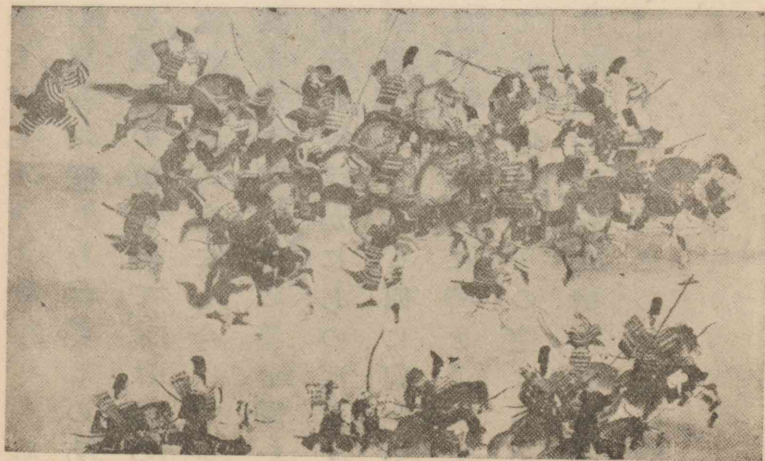
(二) 平清經

て、一炬の煙となしはてぬることあわたゞしかりしか。

ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元この方、天下の榮華を盡したる花の都の故郷を、燒野の原と顧て、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の譽を勵むべき。さても捨難き命や、今こそはうき世なれ。さすがにしのばる、昔のさまの夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に向かへば、秋風到る所野に満てり。嗚呼、きのふは東關のまごに轡を並べて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなたの空こや思しけん、日暮、舳に笛吹く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひこしく耳を欬つ。嗚呼、この時この人、想果して如何。

二 清盛入道

世にもあはれなるは平家とぞ
 いふめる。げにこの一門の盛衰を
 考ふるに、心も詞も及び難きなり。
 案ずれば、一旦の榮華に耽りて、
 百年の計を思はず、今や秋の嵐の
 吹荒ばんずる朝も、春の夜の夢な
 ほ臆にして、覺めての後はさすが
 にうき世と觀ずれども、先世、後代
 すでに梭をかへたるをいかにす
 べき。今を昔に反さんすべもかた
 絲の、よりくづれたる世こそ、返す
 返すも是非なけれ。



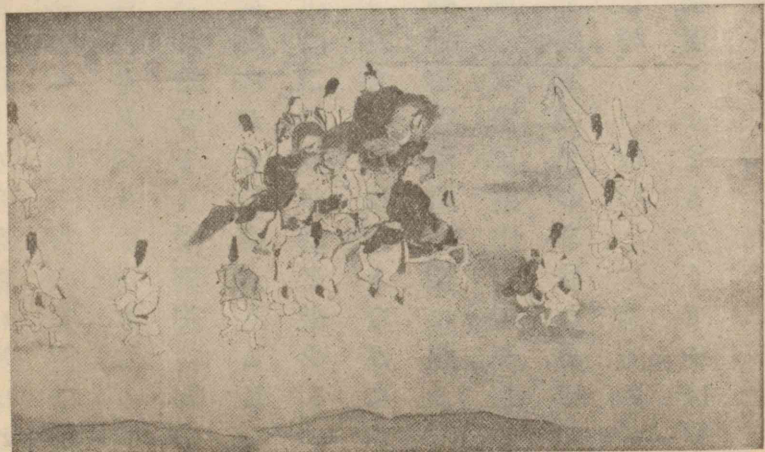
平家の都落

梭をかふ

(一)平忠度。
(二)平維盛。

攝籙

されば、風雅にかくれては、一題
 の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛^(二)
 にほだされては、己身の理在に來
 世の果報を思はず。あはれは桐の
 一葉に散初めて、世はごこしへの
 秋とぞ見えにける。思へば怪しき
 までにあはれなりける運命かな。
 さるにても入道相國の生涯こ
 そ、なか／＼に面白かりけれ。
 弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝
 家の權柄今はた盛なり。一門殿上
 に昇りて六十餘人、私封全國に亘
 りて三十餘州、攝籙の家は名のみ



(春の日權現驗記繪卷)

成敗

十善の帝王

にて、四海の成敗皆ここに集れり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今はこの人ならでは人にあらじ。唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目を敬つるばかりなり。されば十善の帝王畏くも外戚の威におされ給ひて、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の嚴島とぞ觸れられける。なにがしの卿が、入る日をも招きかへさんずる勢。書かれしも、げにこゝわりとぞ覺ゆる。

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげにふるまはれける。こそゆゝしけれ。ここに卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てす。城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕の里のあはれをこゝめける。こそ、なか／＼にあさましかりしか。

咲きも残らず散りも始めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌

卿相雲客

(一) 治承四年福原

還都

(二) 平安京、當時

の落首に「百

年を四かへり

までにすぎ來

りにし、愛宕の

里のあはれや

てなん」(平

家物語)

黄匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こ

そ、あつはれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を

亂しし十萬餘騎は、徒に永き世の笑をこゝめたるに過ぎず。加ふる

に北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都

に逼り、兩山の衆徒亦すでに反覆の色を

示しぬ。平家の運命日に益、急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の

床の寂しきに、霜夜の鐘の響の闇の底に

沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に

至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際

の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮

華身に餘りて、保平のいさを又言ふに足らずと思はざりしか。己に

つらかりし人々を、かくまでに惱まししここの罪深かりきと思



平 清 盛

はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまるらせしことの、中にも非道の所行なりしを思はざり

しか。更に小松の内府が、身命にかへて、乃父の罪業を救はんごせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心を動かすことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、正にその生けるが如くにして死せしな

近咏一首
如何にうる
はしく空に
かゝやげば
とて終りに
は地に沈む
べき日ぞ。
青春人にし
て幾時ぞ、
思へば惜し
き過去なり
き。

近咏一首
如何にうる
はしく空に
かゝやげば
とて終りに
は地に沈む
べき日ぞ。
青春人にし
て幾時ぞ、
思へば惜し
き過去なり
き。

高 山 林 次 郎 筆 蹟

り。

三世の因果
とまれかくま
れ

一我

眇軀

今はの詞にいはいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、返すくも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞわれに對しての今生、後世の孝養にてはあらんずる。一念の執着に、必衰の運命をものごもせず、三世の因果を身にひくごも、なほ怨敵に報いんごを必せり。その事の可否はしばらく措き、ごまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感すべきなり。たごひ四海の波を翻して彼が頭にそゝぐごも、なほこの一我をいかにごもするごご能はざらん。六尺の眇軀ここに至れば天地の大にも比ぶべく、運命われに於て浮塵にひこしからん。いはゆる死して而して生けるものごいふべきか。

—— 楞牛全集 ——

(一)後白河法皇。
(二)山城國愛宕郡。

夜をこめて

夏草の茂みが
末

二 寂光院 その一

(一) 法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ御覽ぜまほしうは思し召されけれども、衣更着、彌生のほごは嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きせず、嶺の白雪消えやらで、谷のつら、もうち解けず、かくて春過ぎ夏來つて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には徳大寺花山院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。遠山に懸る白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほごも思し召し知られて、あはれなり。西の山の麓に一字の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古う造りなせ

蕘破れては霧
不斷の香を燒
きは月常住の燈
を掲ぐ

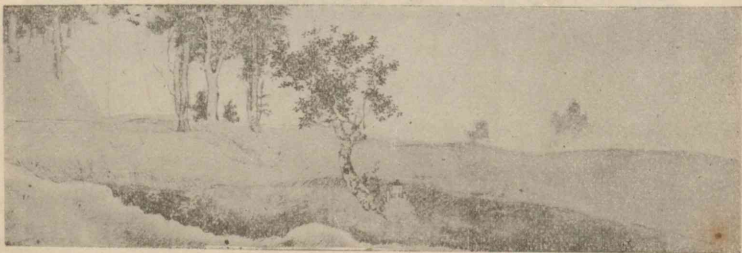
(一)「夏山の青葉
まじりの遅櫻、
初花よりもめ
づらしきかな、
(金葉集、藤
原盛房)

る泉水、木立、よしあるさまの所なり。蕘破れては霧不斷の香を燒き、屏落ちては月常住の燈を掲ぐ。こは、かやうの所をや申すべき。庭の若草しげり合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波にたゞよひ、錦をさらすかこあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山杜鵑の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを觀覽あつて、かくぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて

波の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より落ちくる水の音さ



大原御幸(下村觀山筆)のそ一

夏山の山
蕘破れては霧

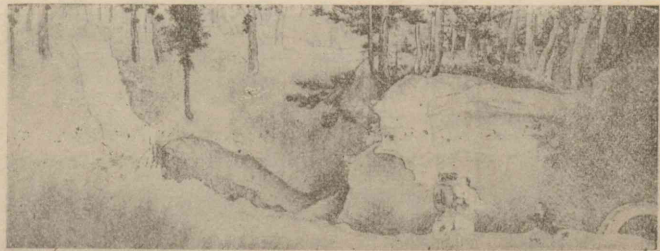
綠蘿の垣
翠苔の山

(一)瓢箪屢空。草
滋三須淵之巷。
藜藿深鎖。雨。
濕三原憲之樞。
(期詠集)

洩る月影にあ
らそひて

まさきのかづ
ら青つゝらく
る人稀なる所
なり

へ古びて、よしある所なり。綠蘿の垣、翠苔の山、繪
にかくとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を
叡覽あるに、軒には蔦薺あぶらばはひかゝり、しのぶまじ
りの忘草、瓢箪屢空し、草顏淵が巷に滋し、藜藿深
く鎖す、雨原憲が樞を濕すともいひつべし。杉の
ふき目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る
月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけ
り。後は山前は野邊、いざさを笹に風さわぎ、世に
たゝぬ身のならひこて、うきふししげき竹柱、都
の方の言傳は、間遠に結へるませ垣や、わづかに
言ふものこては、峰の木傳ふ猿の聲、賤がつま
木の斧の音、これ等が音づれならては、まさ木の
かづら青つゝら、くる人稀なる所なり。



大原御幸の二

五戒十善

捨身の行

法皇、人やある、人やある。と召されけれども、御
應へ申す者もなし。やゝあつて老衰へたる尼一
人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。と
仰せければ、この上の山へ花つみに入らせ給ひ
て候。と申す。とこそ世を厭ふ御習とはいひなが
ら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや、御いた
はしうこそ。と仰せければ、この尼申しけるは、五
戒十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝ
る御目を御覽ぜられ候にこそ、捨身の行になじ
かは御身を惜しませ給ひ候べき。とぞ申しける。
この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布の分ち
も見えぬ物を結び集めてぞ着たりける。あの有
様にても、かやうの事申す不思議さよと思し召



大原御幸の三

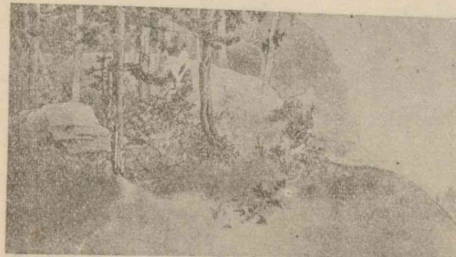
さめぐ

して、抑、汝はいかなる者ぞ。と仰せければ、この尼さめぐと泣きて、しばしは御返事にも及ばず。

二二 寂光院 その二

(一)藤原通憲、鳥羽崇徳、近衛の三朝に歴任した。

や、ありて涙をおさへて、申すにつけて、憚り覺え候へども、故少(一)納言入道信西が女、阿波の内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いさほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほご思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押當てて、忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げに汝は阿波の内侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢さのみこそ思し召せ。とて、御涙

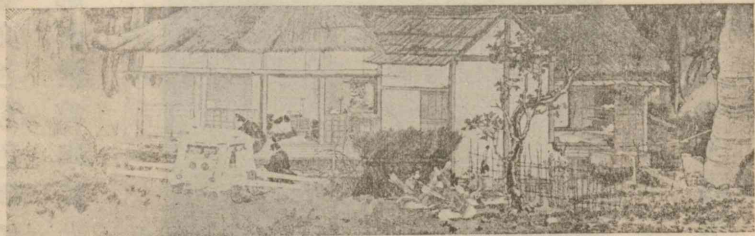


大原御幸のそ四

忍びあへぬさま

せきあへさせ給はず、供奉の公卿、殿上人も、不思議の事申す、尼かなと思ひたれば、こころわりにて申しけり。こぞ、各感じあはれける。

さてかなたこなたを、観覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れ掛りつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引明けて、観覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を掛けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影を掛け、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薰(一)に引きかへて、香の烟ぞ立昇る。かの淨名居士の方丈の室内に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給



大原御幸のそ五

來迎の三尊

八軸の妙文

蘭麝の薰

(一)維摩詰のこと、釋迦と同時代の人。

ひけんも、かくやこぞ覺えける。障子には諸經の要文ども色紙に書いて、所々におされたり。その中に大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。こも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌を思しくて、

思ひきや深山の奥にすまひして

くもゐの月をよそに見んこは

さて傍を觀覽あるに、御寢所を思しくて、竹の御竿に麻の御衣紙の御衾なごかけられたり。さしも本朝漢土の妙なる類敷を盡し、綾羅錦繡の装さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の人々も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。



大原御幸のそ六

花がたみ

申しもあへず

寂光院と建禮門院木像



や、ありて上の山より濃き墨染の衣着たる尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。こ仰せければ、老尼

涙をおさへて、花がたみ臂にかけ、岩つゝ、じ折具して持たせ給うて候は、女院にてこそ渡らせ給ひ候なれ。つま木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實の女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言の典侍の局。こ申しもあへず泣きけり。法皇もあはれげに思し召して、

せきあへず
見え参らす
闕伽の水

御涙せきあへさせ給はず。女院は世を厭ふ御習こはいひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらん耻づかしさよ。消えも失せばやご思し召せごもかひぞなき。宵々ごこの闕伽の水、掬ぶ袂もしをるに、曉おきの袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたるごころに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。世を厭ふ御ならひ、何か苦しう候べき。早々御見参ありて、還御なし参らせ候へ。ご申しければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。

—平家物語—

佛法僧 [自修文]

高濱 虚子

(一)「白峰」佛法僧「一菊花の約」等十篇の短篇小説を集

攝取の光明
聖衆の來迎

めたもの。上田秋成の作。
(二)しづかな林の中に獨り坐して居る草堂の啼き鳥の聲を聞き、佛法僧の祈る心にあつて、教心があつた。雲も水も、いづれも明らかで、三寶の意を法僧の三つをいふ。
法の御山
高野山は眞言宗の本山なればいふ。
(三)昔から傳へて居る佛法僧鳥の啼き、高野山に於て、高野山の啼く聲が、聞えるごころの意。
(四)徳川中世の文學者(二四七〇—二七七〇)年、秀吉の異父妹

(一) 雨月物語を見た人は、高野山といへば、まづ佛法僧鳥の事を思ひ浮かべるであらう。この鳥は日本國中二三の名山にしか居らず、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に、

閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞、二鳥。

一鳥有、聲人有、心。 聲心雲水俱了々。

ごあるやうに、その啼聲が「ぶつほふそう。」と聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特にもてはやされて居る。秀吉の歌といふのに、

傳へにし鳥も御法を行ひの

こゑは高野にあり明の月

ごかいふのがある。公卿、僧侶の歌はもごより澤山ある。中にも上田秋成は、この鳥に豊臣秀次の幽霊を配して、雨月物語の一章として居る。その物語は、趣味ある文字として、嘗て愛唱したごころがあつた。

今夜愈、未央君ごにも奥の院へ行つて、佛法僧の啼聲を聞いて來ようご、小僧から提燈を借りて表に出る。表は暗い。星はあるが、僅かに寺の白い土塀ご

の子・非行に
より文祿四年
(一五五五年)
高野山に放た
れ、ここで死
を賜はつた。
年二十七。
亭女
まつすぐに高
くそびえるさ
ま。

道の區別がつくくらゐだ。提燈を頼りにその白い土塀に沿うて、表通の奥の院
通に出る。

門前の珠數屋も、もう戸を下して居る。一の橋を渡るに眞暗な杉木立になる。
亭々として天を摩するやうな大木が、襖の如く連つて居る。その左右を襖でた
て切つた中に、帯のやうに幅の狭い空が見える。その空には星が光つて居る。
平生見る星よりは形が大きい。しかもその一帯の星の光では、我等の行手を照
らすに足らぬ。我等は提燈の光で纔かに足許を探つて歩く。晝間は氣が附かな
かつたが、縦横に道を横ぎつて居る木の根の夥しいのに驚かれる。その木の根
は、左右に伸びるに随つて隆起して、終に杉の大木に集つて居る。未央君は提
燈を差上げて、その杉の幹に推しつけるやうにして歩く。未央君が三間ばかり
歩いて、まだ杉の半面を照らし盡さぬ。夜の杉は、大きさのわからぬ巨人の
如く突立つて居るのである。

寐鳥の立つ音がする。見るに、提燈の上から圓筒の如く丸い光が空に射出さ
れて、それが高い／＼杉の梢を彷徨いて居る。寐鳥が泡を食ふのも尤もだ。

野ぶすま
むさびのこ
ごも、人が

(一)狂言の曲名。
又「こんくわ
(二)狐を釣る獵師
のなち坊主。
(三)弘法大師の廟
奥院谷に在る。

歩きながら未央君に雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が二つこ
もつて居る。どうやら心細くなる。かういふ時に、野ぶすまが道を塞ぐのだら
うと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥に、うすぼんやり



高野山の奥院道

と明るいものが見える。何て
あらうかと思ひながら行く
と、突然木の間に空が見えて、
そこに鎌のやうな三日月がか
かつて居る。

向ふからふら／＼と提燈が
一つ来る。急に見えなくなる
のは、杉の木に隠れるのであ
る。すれちがひさまによく見
らう。すぐ又現れる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれちがひさまによく見
るに、釣狐の狂言に出る白藏主に似て居る。
行手に燈籠らしい灯が三つともつて居る。近よつて見ると御廟の橋だ。未央

(一)御廟の側を流れる溪流。
(二)御廟の拜堂。

またたく
ちらくする
鉦
伏せておいて
たたく佛具
又ふせがれさ
れともいふ

君が橋の上から提燈をつり下げて、水面を照らして見る。玉川の水は火を受け、ちらく／＼と流れて居る。燈籠堂はもうすぐそこに在るはずだが、眞暗でそれらしい物は見えぬ。怪しみながら近よつて見ると、すつかり四周の蔀を下して、寂然として寐靜まつてゐるやうだ。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。縁に置かれた提燈の灯が、少し離れて心細さうにまたゝいて居る。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺はないはずだが、不思議だと思ふ。その鉦の音に聴きほれて居ると、忽ち近い木の梢で、けたたましい啼聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。或は天狗のやうな嘴をした、鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて、提燈をさらつて行くやうな事はあるまいかと氣になる。氣のせいかな、提燈の灯は一層心細くまたゝいて居る。

小さな咳拂が聞える。「おや。」と思ふうち、また一つ聞える。その邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に、ちよつとした明りがある。ここは晝間線

香なごを賣つてゐた所であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試にその傍に行つて、「もしもし。」と呼んで見る。「へい。」と返事をする。「ちよつと伺ひますが、あの恐しい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない、獸です。」といふ。「へえ、何といふ獸です。」と聞く。「野ぶすまといふて、蝙蝠のやうな、鼯のやうな、妙な恰好をした獸です。」といふ。あれが野ぶすまかど合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つて居るやうですが、あれはどこですか。」と聞く。番人はちよつとだまつてゐたが、「あれは鉦ぢやありません。鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つて居たのが、鳥の啼聲であつたのは意外であつた。殊にそれが、それを聞きたさにやつて來た佛法僧であつたのは、愈意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。やはり「かんかん。かん／＼。」と鉦の音のやうな響に聞える。たゞさう思つて耳を澄ますと、「かん」と響く前に、「ぶつ」といふ低い音が聞える。「ぶつ」と低く響いてから、「かん」と高い牙えた音が響く。つまり、「ぶつかん。ぶつかん。」と啼いてゐる

やうに聞える。多くの書物には、文字通り佛法僧と啼くところがあるが、雨月物語には、佛法といふ字にわざ／＼「ぶつはん」と假名が振つてあつて、「ぶつはん。ぶつはん。」と啼くと書いてあつたやうに記憶する。實際の啼聲は「ぶつかん。ぶつかん。」と聞えるが、まづ雨月物語の「ぶつはん。」に近いやうだ。

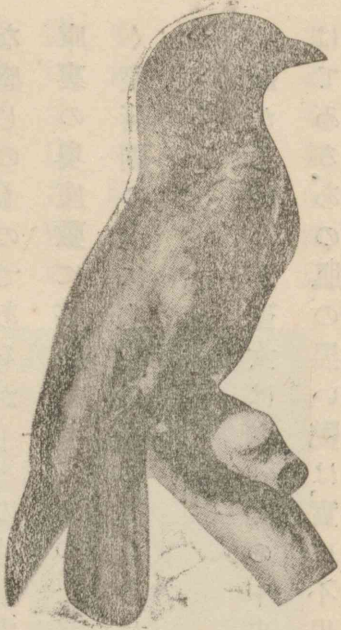
妙なもので、初は鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは、まさしく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を連想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、その金鈴の響に潤のあることに氣がつく。番人が「大概夜中の二時か三時頃にならんと啼かんのに、今晚は宵の口から頻りに啼いてゐた。」といふ。さういふうちも、絶えず「ぶつかん。ぶつかん。」と聞える。普通の鳥とは餘程違つて居る。法の御山の靈鳥として耻づかしからぬ不思議な鳥だ。古來幾多の詩歌が、これをもてはやしたのも尤もだ。私は嘗て、高野の山の靈山であることは、奥の院道の杉の大木で證據立てられるといつたが、否々、杉はものかは、獨りこの佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。

ものかは
なんでもない。

夜陰
夜中。

荒膽をひしく
非常におどろ
く。ごきもを
ぬく。

(一)御廟の東側に
在る。



佛法僧

見るに、縁の端に置かれた提燈の灯も、今は靜かに點つて居る。番人は、淋しい燈籠堂の夜陰に、偶、話相手を得たので、問ひもせぬのにいふ。佛法僧はいつの間にか啼かぬやうになつてゐた。たゞ野ぶすまが、時々荒膽をひしくやうな啼聲をする。

たごき、未央君が「また啼く。」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提燈が一つ來る。女が三人に男が一人「南無大師遍照金剛。」と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

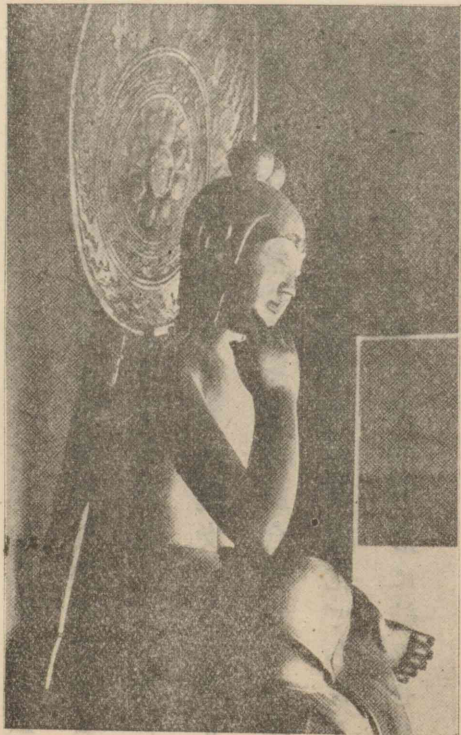
——十五代將軍——

一三 中宮寺の観音 和辻哲郎

中宮寺へ行く。寺といふよりは庵室といった方が似つかはしいやうな小ぢんまりとした建物で、又尼寺のやうな優しい心持もどこもなく感ぜられる。ちやうど本堂——といつても、離座敷のやうな感じのものであるが——の修繕中で、観音様は厨子から出して、庫裏の奥座敷に移座させてあつた。私たちは次の室に、お客様らしく座蒲團の上に坐つて、隔の襖をあけてもらつた。いかにも、お目にかゝる。といふ心地であつた。

懐かしいわが聖女は、六疊間の中央に腰掛を置いて、靜かに腰かけてゐる。あの肌の黒い艶は、實に不思議である。ねばり強いやうな木とは思へぬ流動的な感じで、微細な面の凹凸を實に鋭敏にいかしてゐる。殊に顔の表情の細かさ柔さは、微妙な肉づけの注意が、こ

の黒い艶の助をかりて、始めて完全に現れ得たものと思はれる。あのうつとりと閉ぢた眼に、しみじみと優しい愛の涙が、實際に光つてゐるやうに見える。え、あの微にほゝゑんだ唇のあたり、この瞬間に閃いて出た愛の表情が、實際に動いて感ぜられるのは、確かにあの艶のお蔭であらう。あの頬の優しい美しさも、その頬に指先をつけた手の、いひやうもない形のよさも、腕から肩の清らかな柔味も、あの艶を除いては考へられない。だから光線を固定させ、或は殺し、或



中宮寺の観音

は誇大する寫眞には、この像の面影は傳へられないのである。
 私たちはたゞうつりとして眺めた。心の奥ではしめやかに、静かに、ごめどもなく涙が流れた。そこには慈悲と悲哀の盃がなみなみと充たされ、それをうれしく悲しく飲干す心があつた。誠に至純な美しさで、又美しいこのみでは言盡せない神聖な美しさである。
 私は聖女と呼んだ。観音といふ言葉よりも、その方がふさはしい。しかしこれは聖母ではない。母であることもに處女であるマリヤの美しさには、母の慈愛と、處女の清らかさとの結合が、女を淨化し透明にした趣があるが、しかしわが聖女は慈悲の權化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求めるところを人間の形に結晶せしめたものである。

私の知識の乏しさは、反つて容易に結論をつかませる。凡そ愛の表現として、この像は世界の藝術の中に、比類のない獨得なもので

淨化す
 Maria

陶醉

牧歌的

核心

はないか。これよりも力強いもの、威嚴のあるもの、味はひの深いもの、或ははげしい陶醉を現すもの——それは世界に稀でもあるまい。しかしこの純粹な愛と悲の標號は、その曇のない專念の故に、その徹底した柔さの故に、恐らく唯一な味はひを持つ。その甘美な、牧歌的な、哀愁のしみ通つた心持が、若し當時の日本人の心情を反映するならば、この像は又日本的性質の表現である。古くは古事記の歌から、新しくは歌舞伎、淨瑠璃の文學まで、物のあはれとしめやかな愛情を核心とする日本人の藝術は、すでにここにその最も優れた、最も明らかな代表者を持つてゐるのである。浮世繪の人を酔はしめる柔さ、日本音曲の心をさろかす悲哀も、その根強い中心の動向は、あの観音に現された願望の一つの流に過ぎなからう。法然親鸞の宗教も、柔弱といはれる平安時代の小説も、あの願望と、それから流れ出る優しい心情を基調としないものはない。

半跏

あの悲しく貴い半跏の観音像は、かく見れば、我々の文化の出發點である。古事記の歌も、時代からいつてこの像よりさほご古くはない。勿論現在の形に書附けられたのは、百年近く後である。上宮太子の文化が凝つてこの像となつたことすれば、この像は上宮太子その人の深いしめやかな慈愛を示すものである。日本最初の成文法である太子の憲法が極度に人道的であるのも、亦偶然ではない。

が、これ等の最初の事象を生出すに至つた母胎は、我が國の優しい自然であらう。愛らしい、親しみ易い、優雅な、その癖、いづこの自然とも同じく底知れぬ神秘を持つた我が島國の自然は、人間の姿に現せば、あの観音となる外はない。自然に酔ふ甘美な心持は、日本文化に貫通して流れる著しい特長であるが、その根は、あの観音と共通に、畢竟我が國土の自然自身から出てゐるのである。葉末の露の美しさをも鋭く感受する繊細な自然の愛や、一笠一杖に身を託し

法悦

賦與す

て、自然に融入つて行くしめやかな自然との抱擁や、その分化した官能の陶醉、飄逸な心の法悦は、一見この観音と甚だしく異なるやうに思へる。しかしその異なるのは、たゞ注意の方向の相違で、捕へるところの對象にこそ差別はあれ、捕へに掛る心情には、極めて近く相似るものがある。母であるこの大地の特殊な美しさは、その胎より出た子孫に同じ美しさを賦與した。我が國文化の考察は、結局我が國自然の考察に歸つて行かなくてはならぬ。——古寺巡禮——

一四 いかるがの宮

三 木羅風

やまごの國

上宮王の

ましましし斑鳩の宮、

青葉して夏は今さかりなり。

かぎろふ

古きこのあざざころ、
我は立ちむかししのべば、
白き日のかぎろひ照れる中に、
まぼろし青し。

まだ稚き若草の文明日本に、
吹きめぐる西域のかをりは、
やはらかき詩の佛陀を、
金色にたゞよはせぬ。

「日出づる處の天子、
日没する處の天子に

書を致す。」

かの太子は宣らす、おごそかに國使をして、

覺哥(一)や慧慈等(二)の聖徒は

衣を翻して來り、

藝術興り、文明すゝみ、

憲法十七條、民を導かす。

美しき法隆寺は

千三百餘年の昔に建ちけらし。

嗚呼、巨いなる日本のこゝろを示す

僧伽藍摩。

(一)高麗の僧。
高麗の僧。聖
德太子の師。
推古天皇の三
年(一五三
年)來朝。同二
十三年去つた。

見つゝ我が

涙をながす、

東天の菩薩太子、

君がせし功績のあとを。

やまごの國

上宮王の

ましましし斑鳩の宮、

青葉して夏は今さかりなり。

—青き樹かけ—

一五 四季小品

一 春 雨

中島 廣 足

萱ふける軒は、雨の音静かにて、池水のあやこまやかなるに、いと

深う霞める梢より、翅しをれたる鳥ごもの、そこはかどなく飛びわたるなご、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたゝきたるに、何ごも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなごもをかし。

二 風 鈴

香川 景 樹

月の晴渡り、花の散行く時々を告ぐる、いとあはれなり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめき出でし夕暮に聲あはせたる、物にも似ず。

三 砧

清水 濱 臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの砧をさそふにやあらん。砧の音の雁がねに通

ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂きゆるか。みなあらず。聞く人の心の寂しきなり。

——泊泊舎文集——

四 秋の山田

藤井高尙

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ、鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなご、ごりあつめてあはれなること多かり。かく心をつくしてゐるとはすれど、曉近うなりては、うちまごろむにやあらん、物の音なひもたえへなれば、小屋近く鹿のより來つゝ、何のかひよさうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。

五 冬のこゝろ

伴 蒿 蹊

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時雨

(一)「少壯幾時兮
奈老何」(漢
武帝、秋風辭)

(二)「丈夫爲志
窮當益堅、
老當益壯」
(後漢書馬援
傳)

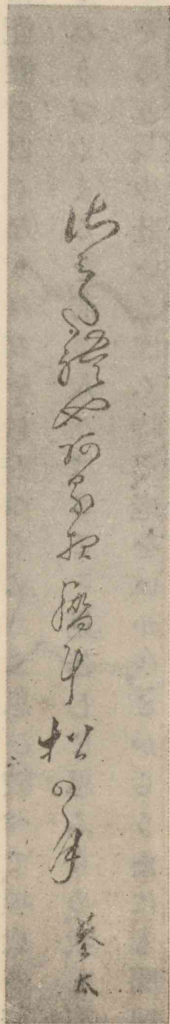
に變り、それもいつしか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに移りて雪と積る。一歳の月日は、隙行く駒のほごもなきかな。振分髪のうちなる子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老の始にて、終に髭髪ひげの白くなりぬるをしもつくづく、と思ひ較べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我も亦しかぞありし。少壯せうさういくばく時ぞ、老をいかん。ごからうたにも聞ゆるを、徒に朽ちはてぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒てふ事もあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘りごもいふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそ言はまほし。老らういては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりに籠るほごに、ねぶりは宵より兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心をうつすこやいはん、冬の心をうつすこやいはん。

一六 青葉若葉

あらたふと青葉若葉の日の光。
目に青葉やまほごごぎす初がつを。
輪ばしる友切丸やほごごぎす。
杜鵑なくや湖水のさゝにこり。
一聲の江に横たふやほごごぎす。

芭蕉 素堂 蕪村 丈草 芭蕉

さみたれや
ある夜ひそ
かに松の月
太



蹟筆太蓼

蘭田刈つて水鶏に遠き寐覺かな。
行水の捨てどころなし蟲の聲。
しづけさや岩にしみ入る蟬の聲。

蓼太 鬼貫 芭蕉

石工ののみ冷したる清水かな。
橋おちて人岸にあり夏の月。
夕立や家をめぐりてあひる啼く。
夕涼よくぞ男にうまれたる。

蕪村 太祇 其角 其角

一七 奥の細道 その一 松尾芭蕉

一首 途

(一) 月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口捉へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招にあひ

(一) 天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。云々。(李白、春夜宴桃李園序)

(二) 元祿元年。

(一)江戸深川六間堀にあつた。

て、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅^(一)に移る。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野^{ウエノ}、谷中^{ヤナカ}の花の梢、またいつかはこ心細し。睡まじき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそぐ。

ゆく春や鳥啼き魚の眼は涙

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではこ見送るなるべし。

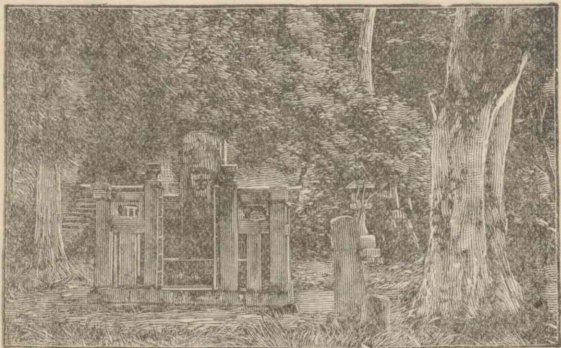
今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天

(二)武蔵國南足立郡。東京の東北口。

矢立

(一)同北足立郡。奥州街道にあつた。

(二)「たよりあらばいかで都へつげやらん」
けふ白河の關は越えぬさ
(一)拾遺集平兼盛



白河の關の址

に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばこ定めなき頼の末をかけ、その日漸く草加^(一)といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるものまづ身を苦しむ。たゞ身すがらにこいてたてるを、紙衣一具は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨筆の類、あるはさり難き錢などし、たるは、さすがにうち捨て難くて、路次の煩こなれるこそわりなけれ。

二 白河の關

心もこなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかに都へこ便求めしも理なり。中にもこの關は風騒の人、心をこむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、

(一) 藤原清輔。二條天皇の御代の歌人。
 (二) 芭蕉の門人。河合曾良。旅行の同伴者である。
 (三) 磐城岩代を流れる大河。
 (四) 磐梯山のこゝ。
 (五) 磐城國石城郡。
 (六) 同相馬郡。
 (七) 同田村郡。
 (八) 岩代國岩瀬郡。子石と須賀川の間にある新田。
 (九) 同岩瀬郡。

りことふりにた

茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事なご、清輔の筆にもごゞめ置かれしごぞ。
 卯の花をかざしに關の晴着かな
(二) 曾良
 ごかくして越えゆくまゝに阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に磐城相馬、三春の莊、常陸、下野の地をさかひて、山づらなるかげ沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつらず、須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日止めらる。まづ白河の關いかに越えつるやご問はる。長途の苦み、身心疲れ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしくしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田うる歌。

三 松島

船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に着く。

抑、ごごふりにたれご、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西

(一) 支那浙江省に在る。一名錢塘江。海潮の奇を以て知られる。

風雲の中に旅寐す

湖に耻ぢず、東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、そばだつものは天を指し、伏するものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃に、枝葉汐風に吹撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人が筆を揮ひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地續にて、海に出て、たる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松笠など、うち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人ごは知られずながら、まづ懐かしくたゞずむほごに、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寐すること、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほごごぎす。

曾良

一八 奥の細道 その二

四 平泉

(一) 十二日平泉へ志す。聞傳へたる姉齒の松緒絶の橋なご人跡稀に、雉兔芻蕘の往交ふ道そこもわかず。終に道ふみ違へて石の巻(二)こいふ湊に出づ。黄金花咲く。詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなご、宿からんごすれご、更に宿かす人もなし。漸く貧しき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道迷ひ行く。袖(五)の渡尾駿(六)の牧、眞野(七)の萱原なごよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼(八)にそうて戸伊摩(九)こいふ所に一宿して、平泉(一〇)に到る。

三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡(二)が

(一) 元祿二年五月
(二) 陸中國西磐井郡北上川東を流れる
(三) 陸前國牡鹿郡の町。
(四) 「すめらぎの御代榮えんごあづまなるみちのく山にこがれ花さく。」(萬葉集)
(五) 陸前國桃生郡橋浦村。
(六) 同牡鹿郡稻生村の字。
(七) 同上。
(八) 同登米郡新田村、新田沼。同郡登米町。
(九) 藤原清衡、子基衡、孫秀衡。
(一〇) 平泉館址、奥の御館。



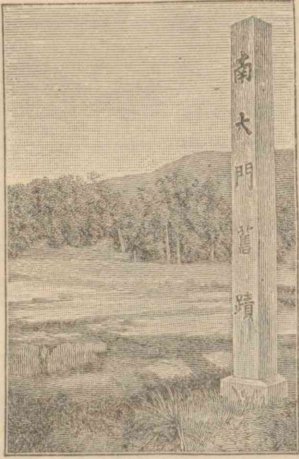
松 島

(一)秀衡の作った平泉鎮護の山、雄雄の金鷄を山上に埋む。
 (二)衣川館。義經の居館。
 (三)泉三郎忠衡の居館。

(四)「國破山河在、城春草木深。」
 (杜甫)

(五)羽後國由利郡鳥海山の西北麓、その海岸には、その後文化元年鳥海山の噴火によつて埋没した。
 (六)同他海郡の町。

跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。まづ高館(一)に上れば、北上川南部より流る、大河なり。衣川は泉が城を繞りて、高館の下にて大



南大門址

河に落入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし、堅め、夷を防ぐ。こ見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢(四)なる。國破れて山河あり、城春にして草青み

たり。こ笠うち敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草やつはものごもが夢の跡。

五 象 潟

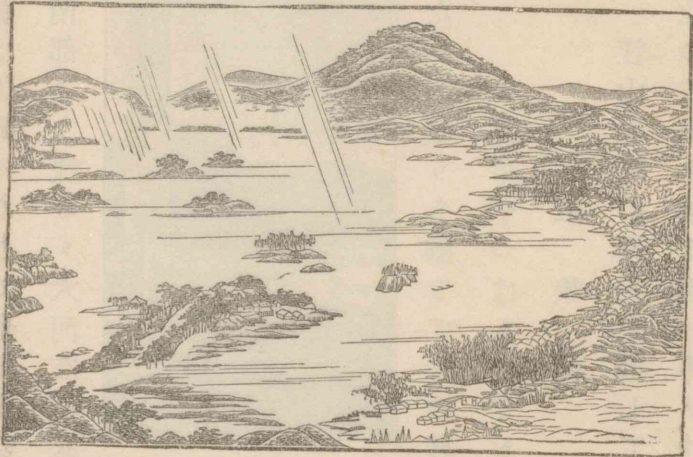
江山水陸の風光を盡して、今象潟(五)に方寸を責む。酒田(六)の湊より、東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、その間十里、日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨濛朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索して雨

も亦奇なりとせば、雨後の晴色亦たのもしと、蟹の苦屋に膝を容れ

て、雨の霽を待つ。

その朝よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほごに、象潟に舟をうかぶ。まづ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をこぼらひ、向ふの岸に上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念を殘す。寺を干満珠寺といふこの寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をささへ、その影映りて江にあり。西はむや／＼の關路を限り、東に堤を

象 潟 (芭蕉翁繪詞傳所載)



(一)「きさかたの櫻は波にうづもれて、花の上こぐあまのつり舟。」(西行法師)

(二)陸前國名取郡陸羽の境關谷山に於つた關谷又小砂川より郡羽後國由利郡吹浦へ越えり所ともいふ。

築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪打入るゝ所を汐越しといふ。江の縦横一里ばかり、佛松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲みを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花。

——奥の細道——

一九 夕日と富士

永井 荷風

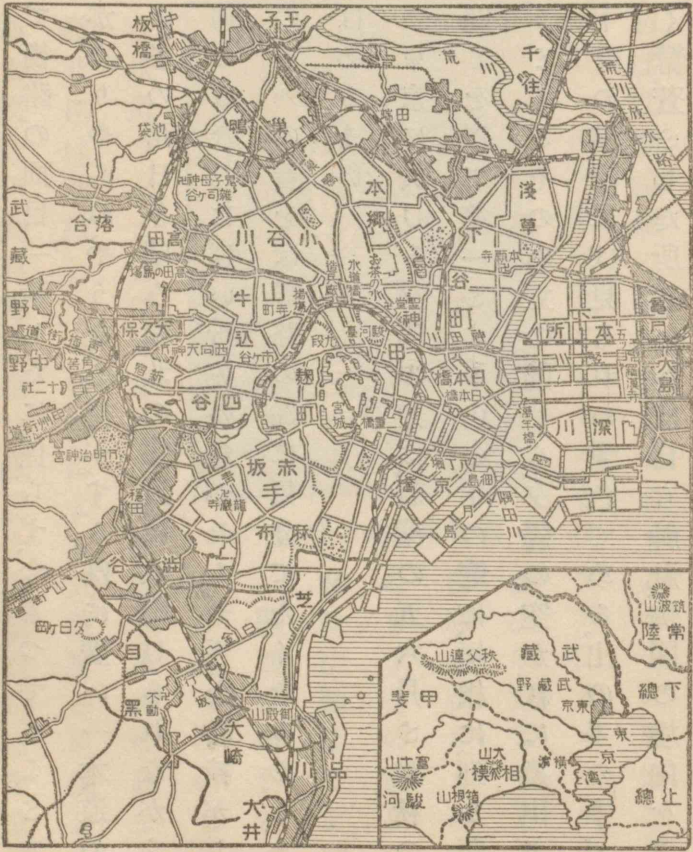
東都の西郊^(一)目黒に夕日ヶ岡といふがあり、大久保に西向天神といふがある。ごもに夕日の美しきを見るが爲に人の知るごころこなつた。これ元より江戸時代のことで、今日わざ／＼かゝる邊鄙な岡に杖を留めて夕陽を見るが如き愚をなすものはない。しかし私は、この頃頻りに東京の風景を探り歩くに當つて、この都會の美觀が夕陽と關係するごころの甚だ淺くないのを知つたのである。

(一)荏原郡目黒町。
(二)豊多摩郡大久保町。

立派な二重橋の眺望も、城壁の上なる松の木立を越えて西の空
 一帶に夕日の燃立つ時、最も偉大な壯觀を呈する。暗綠色の松と、晚
 霞の濃い紫と、この夕日の空の紅色とは、獨り東京ばかりでなく、日
 本の風土特有な色彩である。

夕日の空は掘割に臨む白い土藏の壁に反射し、或は夕風を孕ん
 て進む荷船の帆を染めて、ここにも亦意外な美觀を作る。けれども、
 夕日と東京との美的關係を論ずるには、西向になつてゐる一本筋
 の長い街路について見るのが一番便利である。神田川や八丁堀な
 どといふ川筋、又隅田川の沿岸などは、夕陽の美を俟たなくとも、そ
 れぞれ他の趣味によつて、それ相應な特長を附することが出来る。
 これに反して、山の手の街道は、以前から廣いばかりで、何一つ人の
 目を惹くに足るべきものもない。雪にも月にも何の風情を増しは
 せぬ。かゝる無味殺風景な大通をば、幾分たりとも美しいと思はせ

るのは、全く夕陽との關係あるが爲のみである。これ等の大通は四

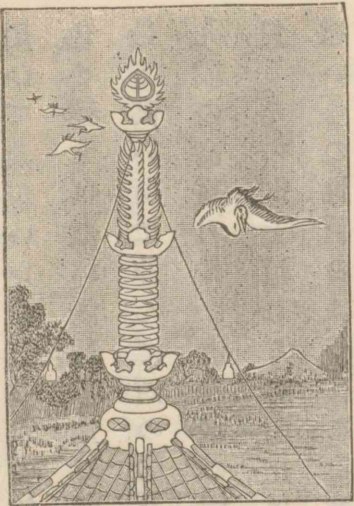


谷、青山、白金、
 巢鴨など、
 それゝ變
 つてゐるが、
 街の様子は
 何となく似
 通つてゐる。
 四谷通は新
 宿から甲州
 街道又青梅
 街道となり、
 街道となり、
 青山は大山街道、巢鴨は板橋を経て中仙道に續くこと、江戸繪圖を

見るまでもなく人の知るころである。それが爲か、電車が開通して街路の面目一新したに係らず、今もつてどこなく驛路の臭味が去りやらぬやうな心持がする。殊に廣い一本道のはづれに淋しい冬の落日を望み、西北の寒風に吹附けられながら歩いて行く、何ごはなしに遠い行先の急がれるやうな心持がして、電車、自轉車のベルの音をば驛路の鈴に見立てたくなるのも、まんざら無理ではあるまい。

東京に於ける夕陽の美は、若葉の五六月と晩秋の十月、十一月の間を以て第一とする。山の手の庭に、垣根に、到る所新樹の綠滴らうとするその木立の間から、夕陽の空が紅に染出された美しさは、下町の河沿には見られぬ景色である。山の手の中でも、殊に木立深く鬱蒼とした所といへば、自ら神社、佛閣の境内を選ばなければならぬ。かゝる所は空を蔽ふ若葉の間から夕陽を見るによいと同時

に、又晩秋の黄葉を賞するに適してゐる。夕陽影裡、落葉を踏んで歩めば、江湖淪落の詩人ならずとも、亦多少の感慨なきを得まい。ここに夕陽の美ごにも合はせて語るべきは、市中より見る富士



北齋筆 富士三十六景の一

士山の遠景である。夕日に對する西向の街からは、大抵富士山のみならず、その麓に連る箱根、大山、秩父の山脉までを望み得る。

關西の都會からは、見たくも富士は見えない。ここに於て、江戸人は水道の水ご合はせて富士の眺望を東都の誇とした。西に富士が嶺、北には筑波の一句は、誠によく武藏野の風景を言盡したものである。文政年間、葛飾北齋「富士三十六景」の錦繪をゑがくや、その中、江戸市中から富士を望み得るところの景色凡そ十數箇所を選んだ。

(一)江戸時代の畫
家、嘉永二年
(二五〇九年)
歿、年九十。
川、本所、五
目、黒、寺、千
住、目、黒、寺、青
龍、巖、寺、青
田、駿、河、水、神
本、橋、上、日
本、橋、上、日
後、屋、の、頭、越
品、草、の、願、寺、山
小、石、川、の、雪、中
等

(一)名は一政。浮世繪師。文化頃の人。
(二)歌川廣重。

(三)本郷區。聖堂は元祿三年徳川綱吉創建。大正十二年の東京大震に焼亡した。

(四)陸軍砲兵本廠。

私はまだこれ等の錦繪をば一々實景に照らしあはしたことはない。しかし北齋及びその門人昇亭北壽、又^(一)一立齋廣重等の古版畫は、今日なほ東京と富士山との繪畫的關係を尋ねるものにとつては、絶好な案内たるやいふを俟たない。北壽がオランダ風の遠近法を用ひてゑがいたお茶の水の錦繪は、我等が今日、目のあたり見る景色と變りはない湯島聖堂の門前を過ぎて、お茶の水に臨む往來の最も高い所に佇んで西の方を望めば、左には對岸の土手を越して九段の高臺、右には^(四)造兵廠の樹木と並んで牛込、市ヶ谷邊の木立を見る。その間を流れる神田川は、水道橋から牛込揚場邊の河岸まで、遠いその眺望のはづれに、我等は常にその富嶽とその麓の連山を見る。そこが出来る。その光景は全く名所圖會と異なるどころがな^(二)い。そして富嶽の眺望の最も美しいのは、やはり浮世繪の色彩に見るやうに、初夏、晩秋の夕陽に照らされて、雲と霞とは五彩に輝き、山

は紫に空は紅に染盡された時である。

——日和下駄——

(一) 水郷の夏 [自修文]

(二) 中谷徳太郎

暖さがましてくるに随つて、水郷は一入趣を添へて来る。逝く春のうら悲しい光のうちに花が散りはてる。五月の生き／＼とした日が照り、海からは新しい南風が水郷の松の梢に靜かに吹く。新緑から青葉へ——、やがて長い雨の日が終る。蘇つたやうな紫紺の空から夏の銀の光が激しく注ぎかゝる。夕潮が高く岸を洗つて、路傍の草の葉を浸して流れる。開放した家々の灯が掘割の水に映つて、さながらに「夜曲」の情趣をゑがく——。その初夏はとう／＼來た。窓の障子をあげる。すぐ掘割にたゞへた水があつて、^(三)棧取や筏の間に流れ寄つた藻の花が白く咲いてゐる。掘割を區切る土手には、潮風に吹かれて葉の短い形のいい松が、並木のやうに生えてゐる。その松のさしかはした枝の間から、そこにもここにも、小橋の影がいくつとなく見えてゐる。

獨居に飽きると、水郷の橋をいくつも渡つて、入江の邊に築いた長い防波堤

(一)東京深川木場附近の情趣をゑがいたもの。
(二)文學者。東京深川の人。大正九年歿。三十五年。

(三)水中に材木を保存するため高く積上げたもの。一棧取の間に釣し手長海老、えんやらやつこ釣りしうれさ。(狂歌)

角ぐむ
葦の芽ののび
ふかがるのなひ

(一)安房上總下總

(二)河竹默阿彌

江戸時代の終
から明治の中
頃の脚本作者
その作には江
戸末期の市井
生活をうつし
たものが多く
明治二十五年
歿年七十
東の間
間、わづかの

の上に立つ。すく／＼と角ぐみかけてゐた枯蘆の芽はいつの間にか伸びて、その根にひた／＼と夕潮がめぐる。そこから西の方を見るに、箱根の連山が、市街の上の空に、煤煙のうちに勢よく起伏してゐるのが見える。紫の富士の姿はなほ一段上の空に浮上つてゐる。さうして夕日がその背の邊に落掛つて、西の空を眞赤に、まぶしく染めてゐる。北には筑波が幽に見え、東には水を越えて、低く房總の山々が眠つてゐる。

このあたり一體の水郷を見渡して、私はいつも江戸の三人の藝術家を聯想する。(二)默阿彌の情調と、廣重の色彩と、北齋の筆致と、この三つの情趣以外のものは、水郷のごこからも見出すことが出来ないであらうか。悲しいかな、それは過去の水郷の面影でなくてはならぬ。

水郷に來た春は東の間に過ぎて、四邊はいつか生き／＼とした初夏の世界となつた。蘆の葉ずれの中から、夏の暑さを呼ぶやうなやかましい行々子の聲が、もう耳もこに聞えるやうな日が來た。海の方から磯の香の高い潮風が吹き、松の葉から月の雫のやうな冷たい露が落ちる。夜は圓やかな月が満潮の水に影を

(一)東京市の東方
郊外一帯は葛
飾へ東、北、南
三郡に分れる
で、古く萬葉
集にも見えて
歌の名所であ
る

開府當時
江戸の出來た
時

投げて、漕いで行く小舟のあとに銀砂のやうに細かく碎ける。町で謠ふ子供の唄。橋に佇む人の團扇の影。夏の水郷ほど私の好きな所はない。しかし晩涼とともに幾千萬となく喊聲をあげて襲つて來る蚊の群には、年々歳々惱まされ通す。名物の蚊はもう六月に入ると出てきて、秋の半ば過ぎる頃まで水郷の到る所に跋扈する。しかし都會生活の膨脹が蚊を東京から追拂つてしまふ日を思ふと、夏の夜風になぶられる紹蚊帳の名残が惜しまれぬでもない。

西の郊外を武藏野と呼ぶならば、この東の郊外を葛飾野、又は大川以東が下總に屬してゐた頃の名によつて總野と呼びたい。高臺と畑地と雜木林と、その間の乾いた赤土の途に砂塵をあげながら馬車の通る武藏野の部分へは、入江の蘆荻洲と松と水田と、運河の上を舟の行くこの水郷を編入することは出来ない。昔深川が殆ど潮入の沼澤であつた頃、東京灣が深く日比谷から上野へかけて彎入してゐた頃の江戸の土地は、ちやうどこの水郷から葛飾野あたりの姿であつたに相違ない。大川の運搬堆積作用が次第に海渚を埋めて平野をつくり、江戸はいつの間にか海の方へ擴つて行つた。さうした開府當時の江戸の面影は、

今は水郷の一角に推遷おしなされて、幾何もない餘命を辛くもつなぎ止めてゐる。水郷の夏が來た。私は書齋を出て晚涼を追ひながら残る「昔」の懐かしい香にひたりたさに、けふも亦一人水の邊ほとりをさまよふ。

—水郷日記—

二〇 雲と落日

尾崎喜八

今太陽が沈むところで、

西の空は眞紅と金と紫との雲の荒海だ。

あの幾十里といふ廣袤を貫いて、

かなりの風が荒狂つてゐるらしい。

燃えかゞやいた巨大な雲が、

これもこれも猛烈に渦巻いてゐる。

炭坑のやうに眞黒な雲、

飛沫を上げてたて蠶たごのやうに靡ないてゐる雲、

廣袤

肉彈戰

逆落しに捲落して燦々きらきらと碎ける雲、

濃密な息もつまるばかりの層になつて

壓迫的にのしかゝる上の方の雲、

一つとして弱いものはない。

優しいのや、にこくしたのは一つもない。

腕つぶしの強い、えりぬきの荒くれたやつが、

筋骨をぶつけ合つて格闘してゐる。

まるで最も兇猛な敵と敵との肉彈戰だ。

あゝ、その中で爛々らんらんと輝く巨大な太陽

瞬一つしないて、

この恐しい亂闘に君臨してゐる太陽。

あゝ、威風に満ちて堂々どうどうと西方の半球へ沈んで

ゆく莊嚴な落日。

—空と樹木—

感興

一一 旅行

山路 愛山

風水相撃ちて波をなす。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住ましめよ。自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は自然の光景に觸れて始めて感興涌出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。しかもこれ自然の神髓に達すべき道には非ず。自然はたゞ質問を發するもののみ答辯を與へ、來り見るもののみ教訓を與ふるものなり。

試に千山萬水を跋渉し、而して後首を回らして故郷を見よ、いかなる感情のこの間に生ずべきか。幼時より爛熟したる某山某水は、始めて遙かなる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なくし

都をば霞さ
こもに立ちし
かざ、秋風ぞ
吹く白河の關
(能因法師)

千山萬水

爛熟

頑童
天涯の遊子
客觀的

て飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天としいへば、大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して、自然も亦その態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は即ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在るものは甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。

我は嘗て蜻蛉を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。その岸に垂れたる楊柳、その野に咲きたる杜鵑花、我は毫もその奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇とを異にせる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて、しかも我に感興を與へざりし

(一)支那宋代の詩人陸游(西暦一七九一年一八七〇年)

桃源一村

自然は、始めて我をして涙をこぼさしむるものとなれり。これ旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て最も味はひあるものに非ずや。舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初ならば杜鵑花霧島紅の雨を降らし、時若し秋ならば兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景、人をして知らず覺えず自然の吸引するところたらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、山重水複疑無路、柳暗花明又一村。前面に鬱々たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途すでに窮するが如し。忽ちにして山廻り、天濶く、鷄犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。この時この情景して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、あるが如くなきが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如きいかに没風流の徒と雖も、終に黄金以外眞の娛樂あることを知る

に至るべきなり。

朝まだき旅立すれば、駒の歩に連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙後にたなびき、清爽の氣身を襲ひ、残月彼方の山の端にかかり、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗とが地歩を争ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋をゑがきて自ら多年風雨の侵蝕せるを示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、

夏草やつはものごもが夢のあと

何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、これ皆旅行に非ずんば得べからざるものにあらずや。

(一)羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

一面の平湖鏡の如き浮島ヶ原、その南を縫へる松林の東海道すべてこれ一幅の畫圖なり。春、天穩にして富士おろし到らず、空氣は

(一)蕪村の句

(二)静岡縣駿東郡愛鷹山の裾なる須戸沼四近の原野

名狀すべからず

漣漪だになき水に似たり。忽ち見る羽蟻の飛ぶを。靜中纔かに動あり、駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。これ豈一室に坐して冥想するものの解し得るところならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖づきて五千尺以上の高山に登り、而して下界を見よ。數箇の山脉は蛇の如く邑を圍み、州を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如くに見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりと雖も、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。アトム(一)とアトムと相撃ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の状態たるに過ぎず。劉(二)は起りたり、項(三)は亡びたり、シーザーは生まれて死したり、帝國も覇圖も俯視すればたゞ一氣のみ。東坡の「山川與城郭、漠々同一形。市人與鴉鵲、浩々同一聲。」と歌へるは眞なり。故に山に登るは、その哲學なり。高山の絶頂に坐するものは即ち哲學の講壇に坐するもの

(1) Atom.

(2) 漢の高祖劉邦

(3) 楚王項羽。(西曆前二三三年一二〇二年)

なり。

人は永久無限を慕ふものなり。人のこの世に於ける境界は有限なり。然れども彼は無限の中に孕まれたるものなるが故に、無限はその欲望なり。雲雀よりも高き峠に息らひて身を雲の中の人となり、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝ、こゝなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙かなる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆるこしの海の

浪をわけてもかへるかりがね

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舎多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。この意義に於て自然は人をして無限ならしむるものなり。これ旅行より學び得たる自然の教訓に非ずや。

— 愛山文集 —

(2) 「雲雀より上にやすらふ峠かな。」(芭蕉)

(2) 源賴政の歌。

一一一 草 枕

松が枝に結べる歌

有馬皇子

家にあれば筥に盛る飯を草枕

たびにしあれば椎の葉に盛る

五十首の歌奉りし時

藤原家隆

あけばまた越ゆべき山の嶺なれや

空ゆく月のするのしら雲

題しらず

讀人しらず

都出でてけふみかの原いづみ川

かはかせさむし衣かせやま

旅の歌

藤原俊成

あはれなる野鳥が崎の庵かな

露おく袖に波もかけけり

東の方にまかりけるに

西行法師

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

いのちなりけり小夜の中山

旅宿花

平忠度

行暮れて木の下かげを宿させば

はなや今宵のあるじならまし

箱根に詣づこて

源實朝

箱根路を我が越えくれば伊豆の海や

おきの小島に波のよる見ゆ

羈中百首の歌よみけるに菖蒲を

宗良親王

菖蒲ひく今宵ばかりや思ひやる

みやこも草の枕なるらん

一三三 歌人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と等しくし、鎌倉室町の世、抑歌道に於て定家を難ぜん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。こいはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて、定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書はなほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に噴々たるは抑、何が故ぞ。

登庸
厭離の志

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清亦勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんことを、されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就いて

惕然



像 傳 阿 頓 作 京 都 博 物 館 藏 (西行)

は、或は傳へていはく、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとして、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり。さて、若き妻老いたる母の重り伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを、思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つ始ぞと、顧もせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。かくて名を西行又は圓位といふ。時に保延六年にして、歳正に

二十三なりき。

(一)右大將源賴朝。

(二)弘法大師。

桑門

悠々自適

西行すでに世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出ては熊野に
 参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて、右幕下に見参し、進みて奥州に至り、
 西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫
 に遊べり。常にいへらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。一
 箇の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々
 自適、興至れば即ち和歌を詠ず。高尾の文覺、これを惡み、弟子に告げ
 ていはく、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。
 數寄を立てて、ここかしこに嘯きありく條、憎き法師なり。何處にて
 も見あひたらば、頭を打割るべし。その後高尾の法華會に、行脚の
 僧の参りあひて、花の陰なご眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。
 「誰ぞ。」と問へば、「西行と申すもの。」といふ。文覺手ぐすねを引き、望のか
 なひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年ごろ承り及

手ぐすね

いひがひな
面やう

びたるに、御尋悦び入り候。さて、迎へ入れて、饗應に餘念なし。弟子た
 ちはいかなる事のいで來んか。と手に汗を握りたるに、このていた
 らくにて、西行は無事に歸り去りしかば、日ごろの仰に違ひたるは、
 と怪しみ問ふ。文覺答へて、あらいひがひなの法師どもや。あれは文
 覺に打たれんずるもの。の面やうか。文覺をこそ打たんずるものな
 れ。といへり。といふ。
 西行深く花月を愛し、又釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思
 ひて、詠じていはく、
 ねがはくは花のもこにて春死なん
 そのきさらぎの望月のころ
 晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建
 久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたる
 もの即ち山家集なり。

幽契違はず

憧る

(一)足利氏中世の
連歌師。文龜
二年(二一六
二年)歿。年八
十二

風月に放浪す
雲水に吟嘯す
吟囊を肥す

跼蹐す

我が國古來詩人多しといへども、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの前後僅かに三人。西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、亦西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人。各その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑、平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、隨つて思想の發展もあることなし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛

天真を忘る

あめそよく
はなたちは
なに風すき
てやまほと
とぎすくも
になくなり
(藤原俊成
の詠)

滔々風をなす

簸却す

堂奥

親呢す

の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも、自ら典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる



西行傳筆蹟

錦囊その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行獨り蹶起して、從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。

西行すでに古來の典型を捨てて、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して、これを視ることなほ己を視るが如く、親

昵して同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

ここにまた我が住みうくてもうかれなば

松はひそりにならん

同情は進んで愛着となりぬ。臨終の大事到る時何物か伴なはん。一切の眷屬珍寶皆我と相忤く。かくはかなみて西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。一旦の沈淪に昨日の親友も今日の仇敵たる時、山色水聲の我に睦ぶこと舊に依り、訪ふ人もなき山里に心永き春秋は尋ぬることを忘れず。この親切なる自然に對して、その慰藉に報ゆることを知らざるものは冷血無情の人のみ。西行は最も自然の價値を認めたるもの、随つてこれが愛着の念も遙かに群衆と選を殊にしたり。

相忤く

選を殊にす

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆる惜しくなる命かな

愛着は迷なり。この雲を去らざれば眞如の月は明らかなり難し。雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。これを以て窓前日夜の友とす。清淡虚無、一心もまた物によつて動かされざる。こと山の如く、機に随つて轉ずること水の如し。來往自在、ここに疑懼の境も去つて、安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

やすく待ちつゝけふも暮さん

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

いとふとてしもはれぬものゆる

眞如の月

清淡虚無

疑懼の境

斧鑿の痕

西行の歌は企ててなすものにあらずして、自ら成れるなり。次に
擧ぐるごころの歌により、そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕
なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

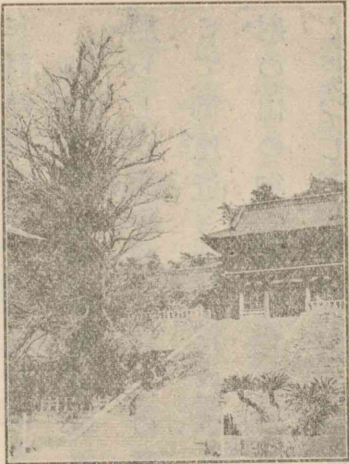
あやしきまでに袖しをれけり

要するに、西行は生まれながらの歌詠にして、歌を作る者に非ず。
天籟吹來つて松濤乃ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易率直を
旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれ
ども、こころさらしに人為の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光
を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。——國文學全史——

二四 銀の猫

上田 秋成

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣
でさせ給ふ。例の事にて御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕う



まつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩して、疾
からず遅からず、列を亂さず練りい
でさせ給へるを、大路に膝折りふせ、
畏み奉る人數多あるに、警衛して、あ
なごだに言はせず、世にかめしく
尊き御有様なり。

かへりまをしして、御手輿に召させ給ふほど、見留めさせ給ひ、御
階の忌垣の許に畏まり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に
飢ゑて、いと瘦黒みづきたるに、衣杖、笠なども乞食者のさましたる、
なほ人ならずや思しけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ、こ

忌垣

ゆくりなし

おほとなぶら

簀子
菟姑射の山

月花の譽

仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、有難く御目賜へり。何處よりの修行ぞ、名をも申せ。いふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水に在處定めず侍る者にて、名は圓位と申す。いふ。聞し召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に誘ひ歸らん。わが後につきて來れいへ。とて、召連れさせ給へり。御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多照らしかゝげたり。けふの道行づこゐてこ。と仰せ給ふ。法師まるれ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は菟姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の譽は物の心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ収めたらんを、語りて聞かせよ。と仰せ給ふ。いみじく畏まりて、思ひかけず大木の御蔭にまゐり侍れば、いともかゝやかしきにぞ、たゞ夢路をたぐるやうに

侍りて、聞え奉るべき事も侍らず。さき御眼に見現されて侍るこそ、いとも有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひあることも打出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏りき、奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思し知り侍り。大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。と申す。打笑ませ給ひ、弓取りし人のもこの心の猛きには、詠む歌も直く明らさまに聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み得まじきものに、宮人たちは沙汰し給へり。や、軍に出立ちて、笛、鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝはいかに。こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし。その御歌を讀み

あて
なよびか

(一)漢の高祖の作
飛揚、威加海
内、安得猛士
守四方
(二)魏の曹操の作

見奉れば、猛く直々しく、調もいご高しごこそ聞きわたり侍れ。いで
や歌よまんごては、ますらを心をこり隠し、あてになよびかにのみ
詠みいでまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさごく猛き
御心のまゝに打ちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあ
へ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起り雲飛揚す。ご歌ひ、槊を横たへ
て、烏鶻南に。ご詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならず
や。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、は
かなき目移りばかりは何にかはされご谷深き鶯の聲、信濃路出づ
る荒駒の歩、いづれの道、いづれの業にも、初より優れたたらんは鬼に
こそ侍らめ。ごいふ。

人々あれ聴き給へ。世は捨てのがれても、たのもしき人の心なら
ずや。汝が遠つ祖の秀郷ごいひしは、世にいみじき弓の上手ごなん
聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそご思ひしみぬる事は忘れ

をこがまし

(一)周代の兵法家
吳起が卒の疽
をすつた故事

ずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。ごは益、恐ある御問はせ
なり。御物語のはてごは、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心よ
り、野山を住所の瘦法師にだに問はせ給ふことのかたじけなさよ。
向かひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳はりなごて聞え
奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈みをさへあ
だなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出てたるい
たづらもの、弦ひかんすべだに心にもごごめ侍らず。たゞ一言の
忘れ難きは、賞を重くし罰を軽くせよごいひしご、任ずるものを辱
しむれば危しごいひし事ごのみ病める士卒の疽をすひしは人の
心をよく買ひなすご。雖も、眞の情よりごも覺え侍らず。籠を減じて
人を危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知る
べき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へることの怪しきまで
賢くおはするを餘所ながら見聞き侍るには、この方の御問、免させ

給へ。さて、額を板敷に擦りつけて申す。
 君笑みほこらせ給ひ、口にく、心さかしき法師なり。今宵は月見る
 夜ぞ。人々土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒飲まざ
 るべし。鹿、猿の中に立交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞ我が
 前にて遊べ。飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は暖にこそ。
 風ひや、かなるに、この火取りて法師に参らせよ。さて、白銀をもて
 作れる猫の形したるを取傳へて、君より賜はす。さて、前に置きたり。
 「鹿、猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師がためには、げに似つ
 かはしき御賜ぞ。さて、三度押戴きぬ。あした御暇賜はりて立出づる
 に、御館の人やごりに誰人の童ならん、括袴の裾朝露に濡れそぼち
 て、いと寒げに居るを見て、これ取らせん。火埋みして手足をあた
 めよ。さて、かのきら／＼しき物を與へて、願もせて立去りぬ。
 童うち驚きて、これ見給へ。見も知らぬ法師の見も知らぬもの賜

青侍

ひつるは。さて青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰か



あなづらはし

筆 齋 容 池 菊

は得させん。拾ひやつる。といふ。
 「さらにさらに、道のそらにかゝる
 ものやはあるべき。あな恐し。殿に
 奉りて給へ。といふ。やがて御館に
 もて参り、仕ふる君を呼びいでて、
 しかく、の事なん申す。いと怪
 し。大將殿の法師に賜ひしを、いか
 て童には得させけん。訝し。さて、ま
 づ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給
 ひ。かの似而非法師、あなづらはし
 く幼げなるものくれし。さて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に
 捨てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせ

よ。さて、取りおろさせ給ひぬ。

西行後にこの事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生まれ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは。さて、涙ごめ難くして物がたりしごなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うち顰みぬべし。

— 藤妻册子 —

二五 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。ごは思へごも豫てより、誰かよくその極を知らん。憐む

(一)「禍之與福兮何異糾纏」(漢書賈誼傳) 塞翁が馬 (二)「福兮福之所倚、禍兮禍之所伏、孰知其一極」(老子)

(二)下總國古河。

べし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々瀕我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍ご、ふりかはりたる村雨の、及は故の物ならで、我が身を劈く響ごぞなりし、憾をここに釋く由もなく、こご急にして、意外にあり、僅かに當座の辱を避けばやご思ふばかりに、夥の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れごもごにかくに、脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を極めたる、心の中はいかなりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋かれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよ。さて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんごご、願はしからずご思へごも、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、彼の樓閣は三層なり。その二層な

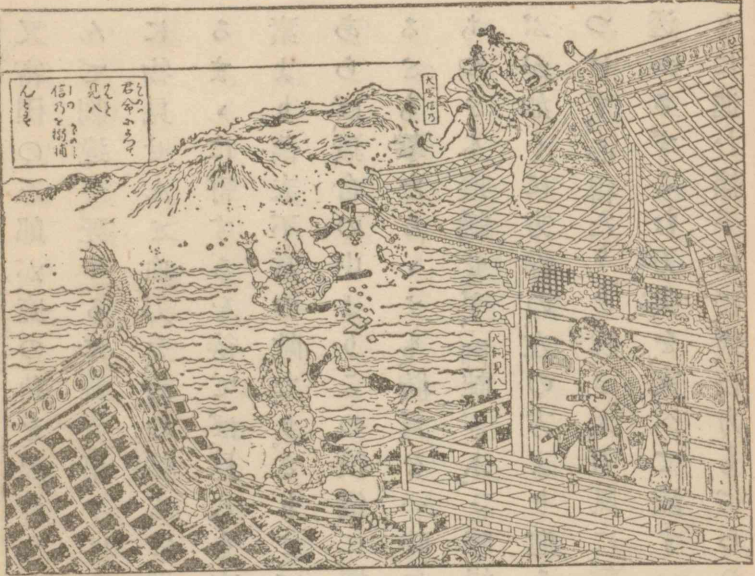
身を霞ませて

(一)足利持氏の子
鎌倉の管領
(二)管領足利氏の
執權職

る櫓の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日
烈しく堪難き、頃は六月二十一日、きのふもけふも乾蒸の、餓熱を渡
る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、ここ生死の
海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶えて、進退すて
に谷りし、敵にしあればいかで我繋ぎ留めんとむさ、びの、樹傳ふ
如くさら／＼と登りはてたる三層の、屋根には目柴翳す由もなく、
かたみに透をねらひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上な
る鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰
を打掛けて、勝負いかに見上げたり。又閣の東西には、腹巻したる
許多の士卒、槍、長刀を煌かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ち
なば撃留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、
連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、

(一)周代の哲學者
名は翟

(二)名は公輸般、
魯の人



芳流閣の上の血戦 (畫挿傳犬八見里)

の後は、絶えて近づく者なきに、今たゞ獨り登り來ぬるは、世に覺あ

脅力衰へず、よく見八に捷ち

たりとも、墨氏が飛鳶を借ら

ざれば、虚空を翔るべくもあ

らず、魯般が雲の梯なければ、

地上に下るべくもあらず、渠

鳥ならずも羅に入りぬ、獸な

らずも狩場に在り、三寸息絶

ゆれば、こゝみな休まん、脱れ

はてじと見えたりけり。

その時信乃思ふやう、初層

二層の屋の上まで、追登らん

させし兵等を、切落しつるそ

(一) 欽明天皇の朝
百濟に使し、
雪夜幼兒の虎
に食はれたの
を憤り、虎穴
をさぐりて虎
を獲た人。
(二) 和田義盛の臣
將軍實朝の前
で二箇の大鹿
角を重れて折
つた。

御説ごふ

〔上一下〕

手練

る力士ならん。きやつはこれ膳臣(一)巴提便(二)が、虎を暴たづにせる勇あるか、又富田の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。遮莫しやく一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそ御座んなれ。目に物見せん。血刀を、袴の稜さもて推拭おひ、高瀬の如き方桴かたに、立つたるまゝに寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。搦め捕ることも撃たるゝことも、勝負を一時に決せんものを。思ひにければちつとも擬議せず、御説ごふ。呼掛けて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登りて、組まんこすれども寄せつけず。心得たり。鋭とき太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖やを、支へて流す。上一下、すべる藁を踏止めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、

見る目はるか

あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいごごはるかなり。さるほごに犬塚信乃は、悔り難き見八が武藝に、敵を得たりけり。思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か。見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を争ひして、いたらく世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠かの鎖く、當たのはづれを、裏かくまでに切りさかれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初に淺痕を負ひしより、次第に疼いたを覺ゆれども、足場をはかりて、撓たまず去らず、壘みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、返す拳こぶに付入りつゝ、やつと掛けたる聲こもに、眉間を望みてはたこ

覆車

打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が及は罅際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがま、左手に引着けて、迭に利腕しかと取り、振倒さんと曳聲合はせて、揉みつ揉まる、力足かれこれ齊しく踏みすべらして、河邊の方へころく、と、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる藁の勢、止るべくもあらざめれど、迭にとつたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累りつ、撞と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、真中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

戯作三昧 (自修文)

芥川龍之介

「これは初から書直すより外はない。」

馬琴は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへつきやる、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹を浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立——さういふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦みに、久しい以前から親しんでゐる。それ等の物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に、暗い影を投げるやうな——彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁ずることが出来ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事による、人並に己惚の一つだつたかも知れない。」
かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪難い落莫たる孤獨の情をもたらした。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものでは

(一) 椿説弓張月
為朝を主人公とした歴史小説。馬琴の傑作の一つ。
(二) 三七全傳南柯夢。傳奇小説。馬琴四大傑作の一。
(三) 支那廣東省の地名。同地産の硯石は支那で最も尚ほ、殊にその紫石を最上とする。
(四) 蹲るみづちの形を模につけた文鎮。
(五) 文房具の一つ。机の上にある硯の先に立てる屏風の形のもの。
勞作
苦心した著作を貫注する。

屑々
つまらない。
取るに足りない。

遼東の豕
世間を知らず
にばかりえら
いと思ふこと
の「遼東有豕
生し子白頭將
二群豕皆白
さいふ文から
出た語。

ない。が、それだけに又、同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であるこ
ともにも、飽くまでも不遜である。その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有



曲亭 (瀧澤) 馬琴

者だつたといふことを、さうして更に厭ふ
べき遼東の豕だつたといふことは、どうし
て易々認められよう。しかも彼の強大な
「我」は「さごり」と「あきらめ」に避難する
には、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまふ、親船の
沈むのを見る難破した船長の眼で、失敗し
た原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力を
戦ひ續けた。若しこの時、彼の後の襖がけたたましく開けはなされなかつたら、
さうして「お祖父様たゞ今。」といふ聲ごとも、柔い小さな手が、彼の頭へ抱き
つかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも鎖されてゐた
ことであらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と

率直を以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父様たゞ今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この話ごとも「八犬傳」の著者の皺だらけな顔には、別人のやうな悦が輝いた。
茶の間の方では、痾高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やか
に聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合はせた
のらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、
わざと眞面目な顔をして、天井を眺めた。外氣にさらされた頬が赤くなつて、
小さな鼻の穴のまはりも、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は、突然かういひ出した。考へようとする努力
と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、よくぼが何度も消えたり出來たり
する。——それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はこうく噴きだした。が、笑の中ですぐ又語をつぎながら、

「それから。」

「それから——ええこ——痼癢を起しちやいけませんつて。」

「おや、それつきりかい。」

「まだあるの。」

「ごんな事が。」

「ええこ——お祖父様はね、今にもつこえらくなりますからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してあるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつこもつこよく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事をいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいこ彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだら

う。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰をもたげながら、顎を少

し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

かういふごとも、この子供は家内中に聞えさうな聲で、うれしさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さう

してうまく祖父をかついだ面白さに小さな手を叩きながら、ころげるやうにして、茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ。それとともに彼の目には、いつか涙が一はいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「観音様がさういつたのか。勉強しろ。痛癢を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へはいいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲とともに、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

初め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と筆が進むに随つて、その光のやうなものは、次第に大きさを増して來る。經驗上その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意して、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ。

「あせるな。さうして出来るだけ深く考へろ。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分にさゝやいた。が、頭の中にはもうさつきの星を砕いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押遣つてしまふ。

彼の耳にはいつか蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の目にも、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上をすりはじめ。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書續けた。

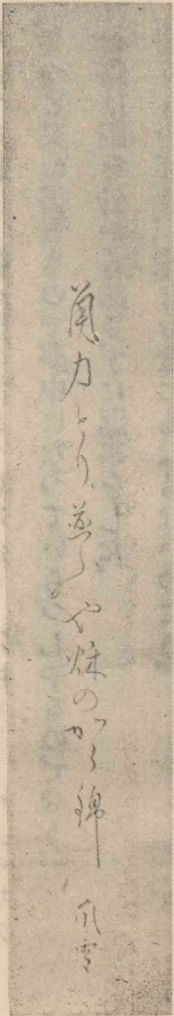
頭の中の流は、ちやうど空を走る銀河のやうに、滾々としてどこからか溢れ

二六 黄菊白菊

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな。
 秋風や白木の弓に弦はらん。
 山は暮れて野は黄昏の薄かな。

嵐雪 去來 蕪村

角力とり並
 ふや秋のか
 ら錦
 嵐雪



蹟筆雪嵐

白露や無分別なるおきごころ。
 まざくこいますごこし魏祭。
 明月や池をめぐりて夜もすがら。
 いなづまやきのふは東けふは西。
 牛しかる聲に鳴たつゆふべかな。

宗因 季吟 芭蕉 其角 支考

東都なる英
 識の書に
 けはまに
 四五人に
 落かよる
 かな
 蕪村



蹟筆村蕪

小坊主の門に立ちけり秋の暮。
 關更

二七 暮秋の雨 加藤千蔭

八月二十日あまり、秋のけはひの懐かしくて、例の隅田川のほとり、石濱の庵にゆきて宿りぬ。有明の月のにはひも、霧たちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、ここは雨のそぼふる日なん、殊にあはれは深かりける。もこより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、

ほろ／＼と散るも哀なり。水の面は動くともなくて鏡の如くなるに、雲の濃き淡きうつろひて、かつ浮かびかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一筋は、さしひく汐にもまじらて、さには縹の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落來るならん。うちむかふ岸の榛原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひま／＼より長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう／＼に薄墨もてかき消したらん如くいとしも遙けきは、たゞ靡かぬ煙ごのみぞ見ゆる。ここかしこより鳥の飛行きつゝ、ねぐらの鷺の翅重げに起出でて、河の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群來て、水の面に浮かべるもをかし。上つ瀬より、筏師の簑笠着て、棹を筏の上に横たへ、おのれこまぬきて、思ふ事なげに居り、筏は水のまに／＼流れ行くもしづけし。渡守舟さしいだせば、大笠傾けて渡り行く人の、

春の野にあ
そふ 千薩
白妙の袖振
はへてかけ
るふのもの
るしはふの
葦摘也

やがて堤をあるくさまも繪によく似たり。すべて一日の中に、筑波嶺より吹下すかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるは現れ、あるは隠れて、限りなき青海原に向かひたらんやう

春の野

あしはふ 千薩

白妙の袖振
はへてかけ
るふのもの
るしはふの
葦摘也

加藤千薩筆蹟

に覺ゆる折もありけり。かくてや、夕ぐれ近くなりゆけば、群鳥のおのがじしねぐらを求むるに、雁の一つら二つら渡り行くなど、

えもいはん方なし。暮れはてても、なほ行く水の色のみ遠白く残りて、川添小田にいはへる水分の神のみ火の、海女のいさりこもいふべく、かすかに見え渡るも哀なり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらん。

—うけらが花—

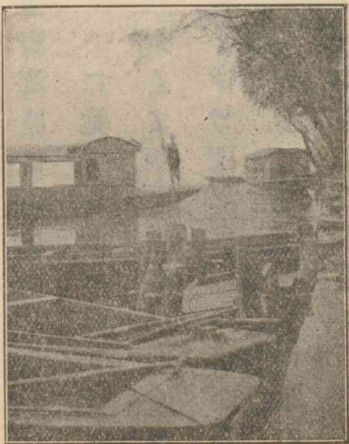
二八 西湖の月

谷崎潤一郎

(一)支那浙江省杭州府城の西に在る風景絶佳、古來十景の稱がある
畫舫
(二)西湖の邊、孤山の麓にある
(三)西湖十景の一

(四)江西省九江府
(五)江西省潯陽道匡山ともいふ風景が頗るよい

夕食を済ませた後、西湖の月を見るべく、ホテルの後から畫舫に乗つて出たのは、その晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて、湧金門から、柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に座を占めて、一點の曇もない大空の月の光を、満身に浴びてゐた。いかに限なく晴渡つた宵であつたかといふ事は、湖を取巻いてゐる四方の山々や、汀に近く女の洗髮のやうにうなだれてゐる楊柳や、稀には岸邊の樓閣などまでが、一つ々々その影を水面に落してゐたのでも、大凡想像するこゝが出来よう。嘗て潯陽江邊の甘棠湖の月を觀た時に、雄大な廬山



西湖の畔の畫舫

鼓橋

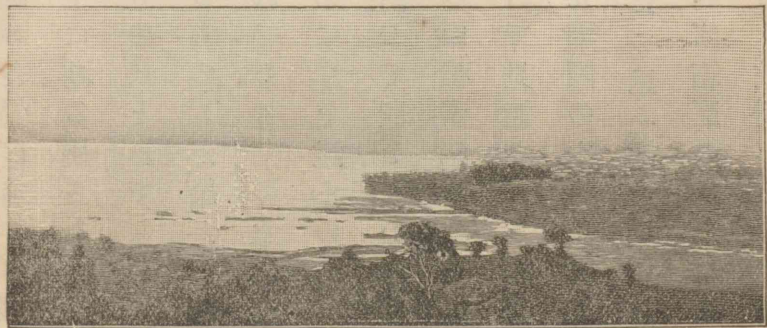
(一)湖南省の北部、支那第一の大湖
(二)江西省の北部、支那第二の大湖

の山容が、水にくつきりと映つてゐるのを眺めた覺はあるけれど、今夜の月は、あの時にも増して朗かである上に、湖の廣さも亦甘棠湖よりは遙かに大きい。水のおもてこいふものは、それでなくてもかういふ晩には、實際よりひろく、こ見えるものだが、船がだんだん陸を離れるにつれて、私の行手に湛へられてゐる湖の水は、腹が膨がるやうに底の方から盛上つて來て、次第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。こゝでちよいと斷つて置きたいのは、西湖の風景が美しいのは、主としてその湖水の面積が洞庭湖や鄱陽湖のやうなばかり、しい大ききでなく、一目で見渡される範圍に於て、蒼茫とした廣さを持ち、優しい姿をした周圍の山や丘陵と、極めて適當な調和を保つてゐる點にあるのだと思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやうだと思へば箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、島嶼があり、鼓橋があつて、變化

視野

はありながら、一枚の繪を擴げた如く、すべてが同時に双の眸まなこにはいつて來るのがこの湖の特長である。今夜にしても、船が進むに隨つて、無限に大きく大きく開いて行くやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向ふへは隠れてしまはないが、その實、岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと遠くにあるもののやうに感ぜられる。

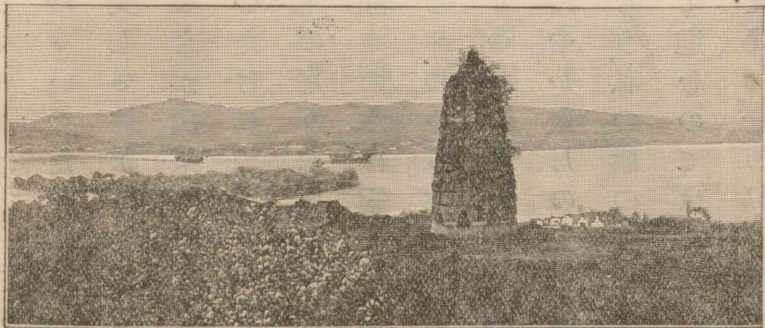
首を舉げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろ／＼と眼を下の方に向けて、私の視野にはいるものは、やがてただ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つてゐるのではなく、水



(一のそ) 湖 西

吃水

の底に沈みつゝあるやうな心地がする。おまけにこの湖の水は、月あかりのせいもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやうに透徹つてゐるので、鏡にも似たその表面に、船の影が倒に映つてゐなかつたら、殆どどこから空氣の世界になり、どこから水の世界になるのだから區別がつかないほど、底の方まではつきり見えてゐるのである。吃水の浅い、草履のやうに薄つべらな船の上に横たはつて、水と空氣の相觸れる平面を滑に進んで行く私の體は、たゞ濡れてゐないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したと言つてもいいくらい



(二のそ) 湖 西

(一) 宋の詩人。名は遺和靖はの孤山を西湖に結ぶ。梅を植ゑた。天禧四年(一〇一二年)六十八年(一〇一二年)歿。
(二) 林和靖の山園小梅の詩の句。

である。舷に顔を出して底を視きはめる。深さはやう／＼二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜水清淺」といつたのは、思ふにこの湖のことであらうが、水清淺の意味と美しさは、かうしてこの底を眺める時に始めて明らかに會得することが出来る。私はさつき、深山の靈泉のやうに透徹つてゐると言つたけれども、たゞそれだけでは、到底この時の感じを言表すにはもの足りない。なぜかといふのに、ここに湛へられてゐる三四尺の深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一種異様な例へば、ごろゝのやうな重みのある滑さと、飴のやうな粘を持つてゐるからである。この水の數滴を掌に掬んで、暫く空中に曝して置いたなら、冷やかな月の光を受留めて、水晶の如く凝りかたまつてしまふだらう。私の船の櫓は、そのねつとりした重い水を、すらり／＼と切つて進むのではなく、ぬらぬらと挫返すやうにして、操られて行くのである。をり／＼櫓が水

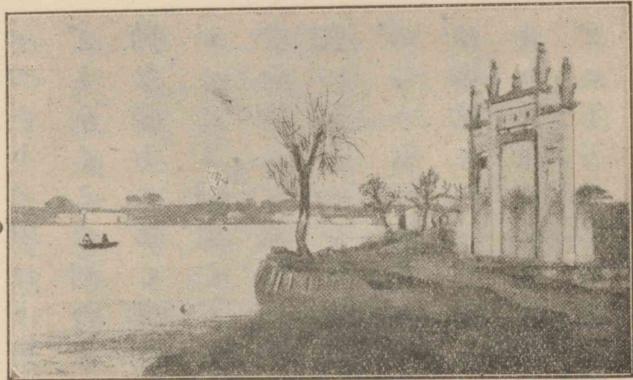
羅衣

面を離れる。水は青白く光りながら、一枚の羅衣のやうに、それへべつたりと纏はり着く。水に纖維があると言つてはをかしいけれども、全くこの湖の水は、蜘蛛の絲よりも更に微な、さうして妙に執拗な弾力のある纖維から成立つてゐるやうにも感ぜられる。こにかくにも綺麗に澄んだ水ではあるが、輕快ではなく、寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのである。そんな感じがするのは、一つには、その水底に蒼苔のやうな細かい藻草が密生してゐて、柔いビロードの床のやうな、暗綠色の光澤を反射してゐるせいでもあらう。實際それは、非常に精巧な、驚くほど美しい艶と潤を持つたビロードといふより外に、適當な言葉を知らない。さうして大空の月の女神は、そのビロードの地質を一層つや／＼と光らせるために、無數の長い銀の絲で、蛇のうねりのやうな波紋を、一面に縫取つてゐるのである。若しこの湖に仙女があるならば、彼の女の纏ふべきマントの色は、

必ずこのピロードであるに違ない。底があまりに浅いために、ごうかするご、櫓は心なくもそのピロードの面をかき亂す。はつご砂埃が風に舞上るやうに、濁つた泥が圓い輪ををがいて、煙のやうに水中に浮かび上る。

柳浪聞

柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて、湖の中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつてゐる背の低い一叢の林は、恐らく桑畑か何かであらう。右岸はご見ると、——船が私の知らぬ間に、ぐるりと方向を一轉したので、何だかかう急に眼が廻るやうに、周圍が濶



然ご打開け、寶石山(一)の保叔塔が、波に没しか、つた帆柱のやうに、遙

(一)西湖の邊にある山。

(一)同上。

かな空に、ぼうつご夢の如く淡く霞んでゐる。その左の葛嶺(一)の山の裾に、灯がちら／＼ご瞬いてゐるのは、新々旅館だらう。ここから眺め渡した様子では、向岸までは非常に遙か、西湖は海の如くひろがつてゐる。しかし海にしては水面が穩すぎて、殆ご波らしいものは眼に留らない。私の體が蟲けらのやうな小さなもので、偉大な大理石の圓盤の中に置かれてゐるのかご想像せられる。子供の時分に野原の真中なごて、眼を瞑つてぐる／＼ご廻つた後で、又はつご眼を開くご、よくこんなひろ／＼ごした、氣が遠くなるやうな天地の大いさを感じた覺がある。だが、それよりもなほ不思議なのは、そんなに廣々ごしてゐながら、ごこまで行つても、水は依然ごして二三尺の——或はせい／＼、人間の胸のあたりまでつかるくらゐな深さしかない。西湖は湖ではなくて、恐しい大きな池であるかの如くに、その時しみ／＼ご感ぜられたのであつた。巨人が箱庭を作

(一)以下いづれも西湖の三面を圍んだ山

るごしたら、きつごこの西湖のやうなものが出来るに違ない。この湖がこのやうに静かなのは、さうしてその面にあらゆる物象が鮮な影を印してゐるのは、畢竟、水底がかくの如く浅い爲に、波らしい波が立たない結果なのであらう。壘の中にも山の影は映るやうに、たごひ二三尺の深さでも、水はやつはり水である。正面に鬱蒼と堆く盛上つてゐる孤山(一)の翠嵐を始として、その左に低く長く女性的な優雅な曲線を起伏させてゐる。天竺山、樓霞嶺、南高峰、北高峰の山が、月の光に融けてしまひさうに、朦朧と消えかゝりなから、なほその影を一つ々々倒に映してゐる莊嚴な姿に接した時、ごうしてこの湖の水底の浅さに考へ及ぶ餘裕があらう。

— 潤一郎傑作集 —

二九 湖沼と人類

田中阿歌麿

瀦溜

窪地に瀦溜せる一泓の水、漫然としてこれを見る時は、多く吾人と相聞せざるが如し。雖も、深くこれを研究せんか、その人類生活の上に及せる影響の甚大なる、殆ど測り知るべからざるものあるを知らん。その氣候上の關係は固より、沿岸住民の性情、思想等に至るまで、その影響するところ實に意料の外にあり。

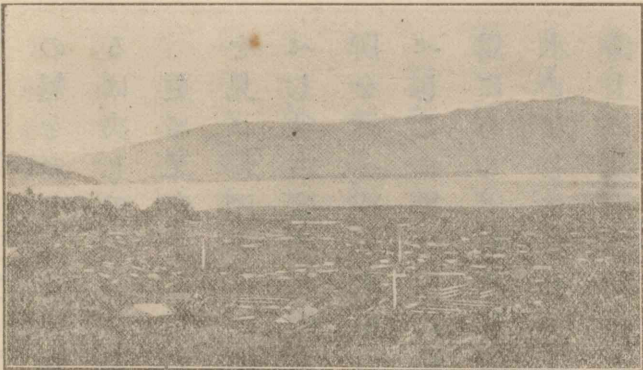
湖沼がその沿岸住民に與ふる最も偉大なる影響は、その氣候の調和作用なり。即ち湖沼のある所は、夏季にありては清涼に、冬季は温暖なるを常とす。然り、湖沼はかく氣温の調和者たるごにも、又天然の一大瀦水器なり。見よ、晩夏の候、強大なる低氣壓の我が日本群島を襲うて、豪雨沛然として至り、坂地に降りし無限の天水の一時に溢れて平地を浸す時、或は陽氣一轉、春風四海を吹いて積雪急に融解し、一大洪水の忽ち山麓を衝く際、狹隘なる溪流は激奔瀉下し、山を崩し、谷を埋め、その餘勢逸して平野に出づるや、田畑を荒し、

陽氣一轉

早魃 野に一青なし 凡百 瑤臺

財貨を損ひ、人畜を傷つけてなほやまず、海に注入して港口を埋め、砂嘴を突出せしめ、はた淺瀬を作りて船舶を破る。その慘狀實に窮るゝところを知らず。この時に當り、瀉水を受くる大潜水器をしてその流程に當らしめんか、滔々たる水勢も頓に澱みて膏の如くならんのみ、湖沼は實にこの潜水器の作用をなすものにして、澎湃たる大洪水の奔騰しつゝ、襲ひ來る時、雖も湖畔の水位は僅かに寸餘を高むるに過ぎず。而してその湖尻より潺々注いで膏野を潤すこと、毫も平日と異ならざるなり。これに反して早魃久しきにわたり、井水涸れ、地殼裂け、野に一青なき時に當り、無盡藏の靈泉を供して吝しまざるもの、實に又湖沼なりとせずや。抑、凡百のもの溢れざれば必ず盡く。獨り湖沼は受けて淫せず、放ちて涸れず、時所に依りて表裏することなき、神人の坦懷に比すべきものあり。山間の農民が湖神に詣でて膏雨を祈り、はた湖水を視て以て龍宮の瑤臺となす

所以のもの、決して故なきに非ざるなり。



湖沼はかく天然の一大潜水器たることに、又濾過器なり。濁流の滔々として湖沼に入るや、その拉し來れる土砂は湖底に沈澱し、湖尻より流出する水はすでに濾滓せられて、淨明透徹、水晶を溶かしたるが如し。見よ、アルプス幾百の氷河の輸送し來れる土砂を運べるローヌの濁流が、一度、ゼネバ湖に入り、而してその流れてゼネバの市を過ぐるや、又舊態を存せず、幾萬の生靈賴りて以て生を樂しむに非ずや。

更に湖沼を交通機關として觀察せんに、羊腸たる山谷の險路を攀ぢ、蜿蜒たる長曲線をたごらんよりも、弓の弦に於ける最短距離

(1)Rhône、アルプス山系に發してゼネバ湖に入り、それよりフランスの東南部に經て地中海に入る。(2)Geneva、スキス、フランス境上にある湖水。

羊腸

霄壤も營なら

によりて達すべき水利の便あり。その勞力に於て、その時間に於て、
難易、長短の差、實に霄壤も營ならざるなり。想ふに、往時湖畔が開化
の魁をなし、又現時湖畔に於て、その地方に於ける都市の存在を見
るは、決して怪しむに足らざるなり。

更に又史上に於て、湖沼がいかに人類の生活、思想に影響せしか
を見よ。抑、湖沼は天然の濠にして、敵を防ぐべく、國土の安全を保つ
べし。往古蠻族の棲息せし跡を踏査するに、多くは湖沼に面して居
所を構へ、或は水中の島嶼、或は淺洲の上に城壘を築きしを尋ね得
べし。これ等は單に飲料水を得んが爲に、又は運輸の便を計らんが
爲に、或は寧ろ外敵の侵撃を避けんが爲に、湖沼を自家防衛の濠
水となしたるなり。江州の安土城、信州諏訪の高島城(一)の如きも、皆兵
備上に湖沼を利用せしものたり。
かくて湖畔の住民は外部よりの擾亂を被ることなく、しかも湖

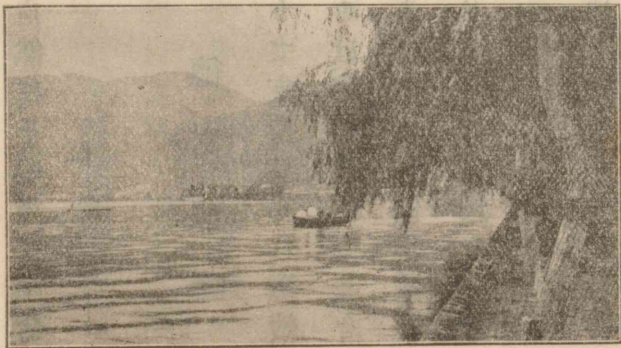
(一)蒲生郡。天正四年織田信長が築いた。
(二)上諏訪町。諏訪氏の居城。

氣魄

水晶盤裏

沼の流域の、多くは峰巒を以て取圍まるゝが故に、その住民の氣魄
自ら團結自助の精神に富み、軀幹強壯にし
て風格豪邁なるが上、深碧の湛水はよく思
索を裨けて智能を啓發せしむ。

湖沼の美術、文學に於けるやいかに、漾々
たる水晶盤裏、巒山の翠綠をたゞへて風色
すでに佳なり。況や月に、花に、はた紅葉に、靜
かなる美を添へて美は愈、美に、趣は更に趣
を加へ、正にこれ自然の一大活畫、一大詩篇
に非ずや。細雨しぶきて湖面の風情夢の如
き時、白鷺の蘆荻繁き汀にたゞずむ趣は、早
くより絶好の湖畔的畫題としてゑがかるゝ。こころ。冬季四巒の白
雪皚々として、玲瓏たる湖鏡に懸る姿の崇高なる、他に比すべきも



湖 助 諏

眼睛を點す
面上三斗の塵
を浴ぶ
長嘯す

のあらず。實に大自然の美觀はこの湖沼を得て、始めて眼睛を點じたりと謂ふべし。若しそれ日夕面上三斗の塵を浴びて人寰に營々たる士の、寸暇を偷んで湖畔に長嘯せば、大自然はその靈に生命の源泉を注いで、これを復活せしめん。

— 諏訪湖 —

三〇 當今の憂

徳富蘇峰

日本帝國の運命は、たゞ日本の自力に據りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃むの外に、方便も手段もあらざればなり。即ち千百の方便手段ありとするも、それは自力主義踐行の後に於て、始めてその效用を見るべければなり。

然りと雖も吾人がいはゆる自力主義は、決して自滿主義にあらず。自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや。排外主義をや。吾人は

自力主義
我自ら我を恃む

歩趨を一にす

我が短を補ふべく、世界のすべての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩趨を一にせざるべからず。しかもこれたゞ内に自ら主持するところありて、而して後外に向かつてこれを求むべきのみ。

協調

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、その獨得の立脚地に於て、内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋のドイツにあらず、東洋の英米にあらず、日本は即ち東洋の日本としてなり。日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に據りて、その裁斷を下すにあるのみ。かくの如く内すてに主持するところあり、乃ち外に向かつてその益を求む。必ずしも英米といはず、必ずしも獨佛といはず、世界の長は皆採つて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何を

情氣滿々

小成に安んず

磨勵自彊

Wilson

か遲疑せん。

惟ふに我が國當今の憂は、第一、國民の情氣滿々たるにあり。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。いはく、日本はすでに五大國の一に位せり。いはく、日本はすでに東洋の盟主たり。いはく、日本はすでに富強なり。而して更に磨勵自彊、この國運を一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。第二は、世界の大勢を根本的に謬解せるにあり。いはく、世界は泰平なり、今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的の葛藤は國際聯盟の爲に自動的に安排せらるべし。彼等は待つあるを待まず、その來るなきを待み、その待むべきを待まず、待むべからざるを待むなり。吾人は今その妄想たることを説破するまでもなく、ここに英國現在の參謀總長、Wilson 元帥の言を引證すべし。いはく、吾人が大戦最中に於て屢、耳にしたる「今次の戦争は爾後の戦禍を杜絶するの戦争なり。將來はた

危殆

闡明す

だ平和あるのみ。」この言は、畢竟人を瞞着したる妄言にてありき。看よ、現在に於ても、世界の各所に二十乃至三十の戦争行はれつゝあるにあらざるや。果して然らば、吾人は今後の戦争に向かつて、大いに準備するところなかるべからず。我が帝國の前途は實に危殆なり、不安心なり。これ英人に與へたる訓戒なれども、採つて以て我が訓戒となすに足らざらんや。第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも、寧ろ世界の多くのものより排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪のみいふべからず。しかもその原因は何處にあるにせよ、事實は正しくかくの如し。而して我が國民は、かくの如き不愉快なる事實を正視し、識認し、これに處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことに努めず、進んで世界に向かつて自國の真相を闡明し、

苟安を儉取す

世界の誤解を正すここに努めず、たゞその日暮しに一時の苟安を儉取しつゝあるは何ぞや。第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。いかに世の迫害を被ることも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるにあらずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

蓋し吾人が自力主義といふものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、まづ自ら不敗の地を占め、而して後徐に外に向かつて我が志を行ふにあるのみ。かくの如くして世界と協調を保つべく、かくの如くして東洋の盟主たるべく、かくの如くしてアングロ・サクソン民族と角逐して世界の文化に貢献し、我が大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣怠慢、強ひて自ら欺きて眼前を糊塗し去らんことす。かくの如くして止むなくんば、我が帝國は精神的

角逐す

眼前を糊塗す

に死亡するなり。

——大戦後の世界と日本——

強ひられた文明 「自修文」

厨川 白村

自己のなかに充實してゐる力で動いて行くことは、自然であるが故に苦みがない。殊にその力が深い底力モットである場合には、その動方は、たゞひのそ／＼した鈍重なものであつても、それには確かさもあれば、強味もある。そして少しも危かしさや無理がない。たしか華嚴經の句だとか聞くが、「獅子の歩」といふやうに、速度は鈍くても、その足がしかと踏みしめた跡には、草も生えないことさへいはれる。極めて保守的な外観を具へてゐながら、しかも一面又極めて急進的な文明を建設してゐるものは、今日、英米二國の根本をなすアングロ・サクソン人だ。彼等は極めて鈍重な保守性を有しながら、自分の底力で／＼やつてゆく。外部から何を持つて來ても驚かない。ちやうど胃袋の丈夫なものが、すべての物を消化し盡すやうに、外國の勢力に對しても、外來の思想に對しても、びくともしない。うまくそれをこなして行つて、今日では世界の氣勢を左

(一)名は辰夫、京都帝國大學教授、文學博士、京都の人、大正四十二年歿

右する最も優勢な民族となつた。例へば、露國の過激派の思想の如き、英國があれを今後いかに消化して行くかは、世界文化の變遷に留意するものの等しく注目するところである。曾て流血の慘を演ずるの愚をなさずして、彼等がフランス大革命の影響を受入れたやうに。

これとは正反對に、いつも外來の勢力や思想に動かされ、迫られて、さながら後れざらんことを恐れるものの如く、それに追いついて行くだけにすら骨の折れるやうな民族生活をしてゐることは、非常に不自然であり、苦しいことである。さういふ民族の文明には、無理があり矛盾があつて、常に不安が伴ふ。たとひそれが急速な進歩をしてゐるかのやうに見えても、實際の内幕は火の車を廻して、喘いでゐる有様だ。日本の現代文明は、いかにも残念だが、かういふ外國から強ひられた文明といふ性質を免れ得ないやうに思はれる。最初浦賀灣に現出した黒船といふ外來勢力に迫られて、新文明を建設するの已むを得ない状態に投げこまれて以來、半世紀を経た今日、なほ外から強迫せられて、無理やりに動かされてゐる氣味がある。

(Dive)
車馬道
(Tank)
歐洲大戰中イギリスが發明した道もない所を突進する武器

まづ具體的な卑近な例でいふと、自動車といふものを無理に外國から持つて來る。持つて來るから使つては見るが、日本の道路はまだ、自動車を走らせるやうに出來てはゐない。東京市街などで自動車に乗ることは、西洋の坦々たるドライブを走らせるのと違つて、甚だしく不愉快なものである。乗つてゐると體が飛上つたり震動したりするところは、タンクもかくやと思ふばかりの苦しさである。車輪のタイヤのいたむことは勿論、道路そのものが又この自動車によつて益、甚だしく損傷せられて、文明國にあるまじき惡道路となるのである。仕方がないから今大慌てに慌てて、道路改良を叫びまはつてゐる。

外國から好いものを押賣に來る。世界の大勢だから仕方がない。それを國に入れて用ひないわけには行かない。しかしその要求に應ずるだけの資格や力は決して内に備つてゐない。例へば、電話といふ便利なものが外國から來たから、それを使はうとしても、十分にこれを架設して、米國に於けるやうに何人の家でも自由にこれを用ひさせるといふわけには行かない。そこで電話が株券のやうに賣買せられて、驚くべき相場が出るといふ他の文明國に於て全然例のな

い珍奇な現象を生ずる。

ところが、かういふ現象が精神生活や道德生活の問題になれば、更に一層甚だしい。例へば、汽車や電車を外國から輸入したはよいが、日本人の腦中には汽車道德もなければ、電車道德もない。東京などで電車に乗ることは、實際命がけなのである。電車乗客の行儀が悪い爲に押合ひへし合ひ、喧々囂々、踏まれなくとも濟む足を踏まれたり、早く乗れるものが乗れなかつたりする。そればかりでなく、「太股を出すな。」などいふ揭示を車内に必要とするほどまでに亂暴な乗客が、果して他の文明國にあるだらうか。日本人はまだ汽車や電車に乗るだけの資格を備へてゐないのに、無理やりに汽車電車を使はうとするから、あの不愉快、あの危険を忍ばねばならぬことになる。

又例へば、立憲政治といふものが世界の太勢に動かされて出來たが、日本人の頭腦にはそれを運用するだけの力がまだ足りない。若し立憲國民たるべき力もなく資格もないものが、立憲政治をやつてゐるとしたら、道路やら沼やら川やらわからぬ通路の上を自動車を走らしてゐるよりも、なほ更苦しいことであらう。

思想の發達は道路の改良修繕よりも、遙かに骨が折れるからである。

外國から無理やりに世界の進運に追従すべく強ひられた文明だから、多くの時代錯誤や矛盾が、當然の結果として、生活現象のあらゆる方面に現れる。要求はひし／＼と迫つて來ても、これに應ずるだけの力がない。ちやうど譬へていふと、落第すべき生徒を、教員會議の結果無理に及第させた場合と同じやうに、當人は力が不足してゐるのだから、その上級の學科程度に追ひつくだけでも、非常な苦痛を感じるのである。自分の力で／＼進級して行くものと非常な差を生ずるのは、怪しむに足りない。

制度とか、法律とか、機械器具の類は、たゞそれだけを輸入して、世界の太勢に順應して行くだけに改めることは、必ずしも難事ではない。難事ではない。日本はここまで苦しみながら、喘ぎながらも進んで來たのであるが、根本の内生活、思想生活の問題になると、そら汽車、そら電車、そら自動車といふ風に、お手輕に變轉させて行くわけには行かない。今日なほ天保錢時代の物の考方をしてゐながら、それで今の産業組織、立憲政治の世に適應させよう

時代錯誤
英語アナクロ
ニズム
(Anachronism)
の譯語、新し
い時代に合は
ぬ舊時代の思
想風俗などを
復活すること。

(一) 厨川白村の遺稿隨筆集。大正十三年東京福永書店發行。

とするのだから、我々の生活は非常に苦しく、不愉快ならざらんとするも得ないわけではないか。
日本人が眞に自分の力で動いて行くことの出来る日は 果していつであらうか。世界の進運に引きずられないばかりか、自らその先登に立つて進んで行ける時が、果していつの日に来るだらうか。すべての事を根本から考へ直して見なければだめだ。根柢のないお國自慢をしてゐないで、又固陋頑冥な偏見なごに囚はれないで。
——(一) 十字街頭を往く——

改訂實業帝國讀本 卷七終

新編七讀本

大正九年十二月二十八日印

大正九年十二月三十一日發

大正十四年一月二十三日改訂印刷

大正十四年一月二十六日改訂發行

改訂實業帝國讀本與付

全	自	至	價
十冊	卷一	卷十	各金四拾八錢
	卷二	卷七	各金四拾參錢
	卷三	卷八	各金四拾貳錢
	卷四	卷九	各金參拾七錢
	卷五	卷十	各金七拾壹錢
	卷六	卷七	各金七拾壹錢
	卷八	卷八	各金七拾壹錢
	卷九	卷九	各金六拾壹錢
	卷十	卷十	各金六拾壹錢

著 者 芳 賀 矢 一

印 發 者 兼 行 者 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 富 山 房

代 表 者 合資會社富山房社長 坂 本 嘉 治 馬



發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社 富

山 房

電話神田二四、二四、二四番 振替口座東京五〇一〇番

第...種三...年乙組 濱野七郎

文庫
25
849

広島大学図書
2000302849
